

096468-000-3

特9-749

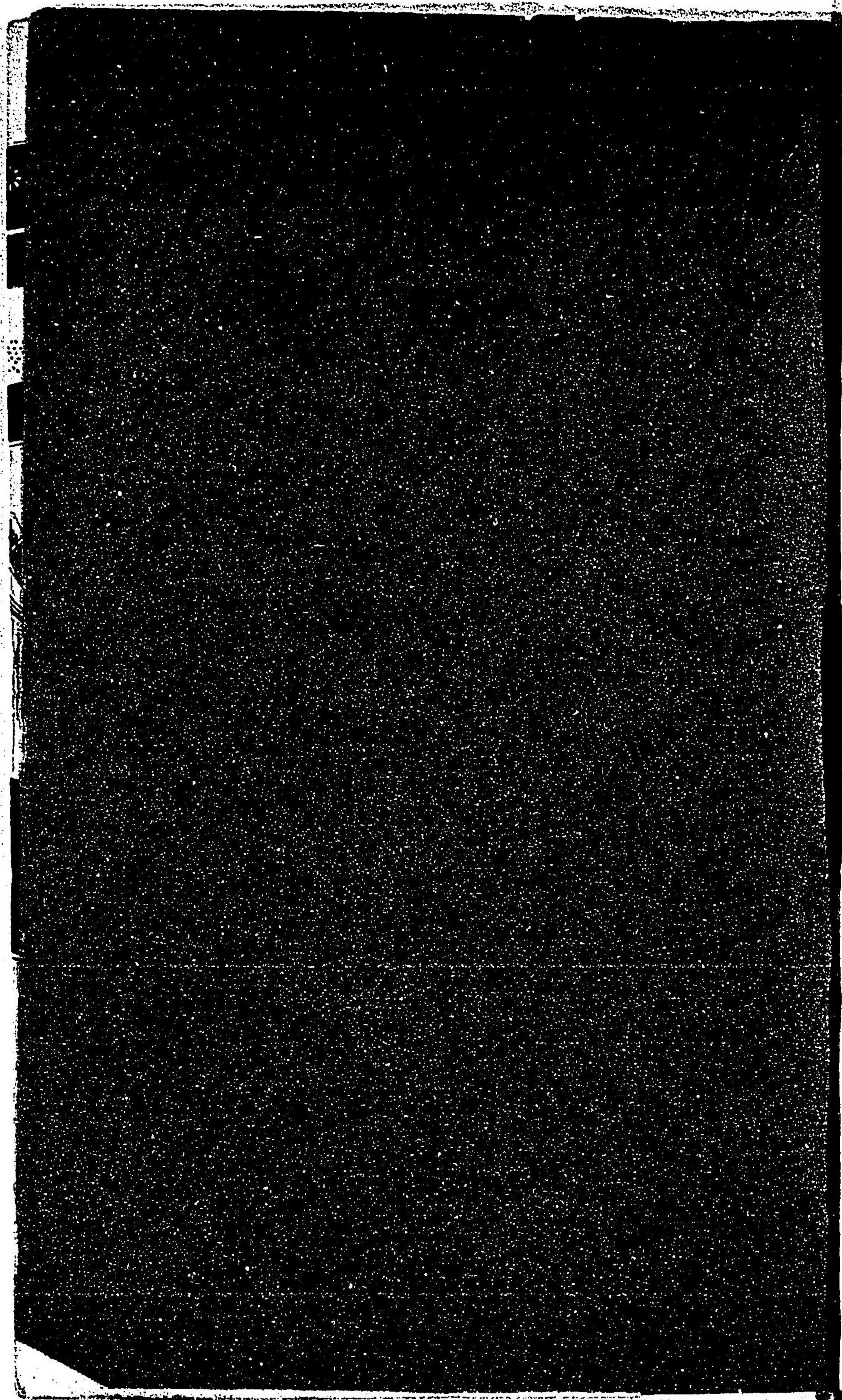
一休和尚(悟道問答)

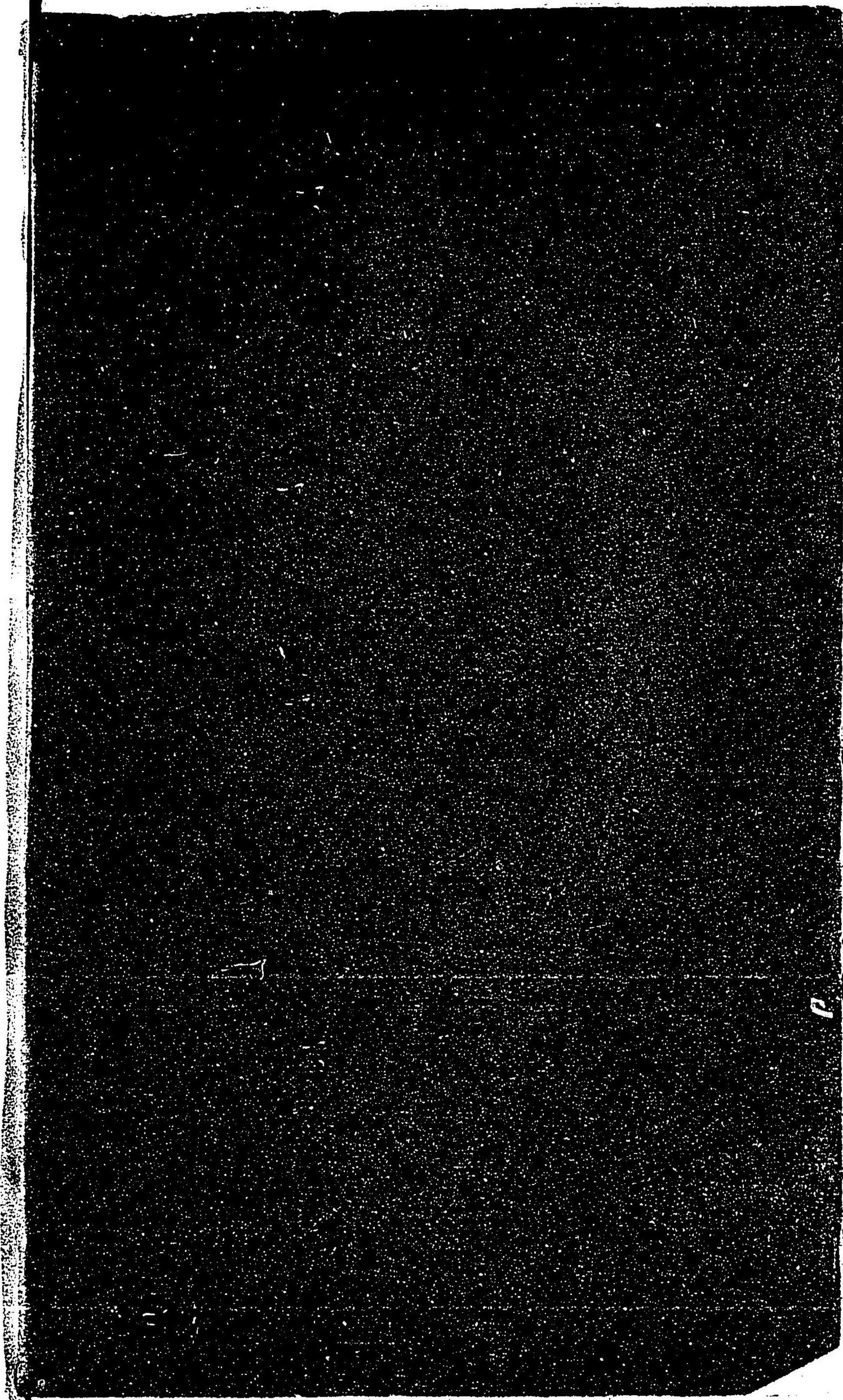
三省社 一瓢/講演

M44

DBS-0180









山
口
信

山口
一休
和尚

持9
749

一 休 和 尙 一

悟道
問答
一
休
和
尙

第 一 席

三省社 一 歌 講 演
山 田 唯 夫 速 記

明治
44. 4. 10
内交

身は高貴の家には生を受け乍ら此世に暫し墨染の袖に真如の
有漏地より無漏地へ歸る一休み、
風吹けば吹け雨降れば降れ、
月を受けて、塵の此世を有漏地より、無漏地へ歸る一休みと、悟
り開きし紫野大徳寺の生き如來と、其名を後の世に傳へたる
一休大禪師の立ちよ、其入滅に至る迄の珍談逸話を、本日
より伺ひ續ける事に仕ります、尤も此の講談は、一瓢の専賣
特許、否十八番でござりまして、先年故人になりまして、恩父

一 休 和 尙

の 一 瓢 が、 多 年 得 意 に して 辯 じて 居 り まし た る 讀 み 物 で ご ざ い
ま す か ら、 何 う か 其 の お 積 り で、 宜 し く 御 愛 讀 あ ら ん 事 を 願 つ
て 置 き ま す、 抑 も 一 休 禪 師 は、 如 何 な る 御 素 性 の 方 か と 申 し ま
す る に、 恐 れ 多 く も 人 皇 九 十 九 代 後 小 松 帝、 御 代 知 ろ し 召 さ れ
た 當 時、 都 六 條 に 日 野 中 納 言 と 云 ふ 方 が ご ざ い ま し て、 此 の お
方 の 狂 に 當 た る 照 子 殿 と 云 ふ の は、 其 の 當 時 評 判 の 御 美 人 で、
前 の 南 朝 後 龜 山 帝 の 御 寵 愛 を 蒙 り 居 ら れ た が、 天 皇 崩 御 の
後 は、 叔 父 日 野 中 納 言 の 御 館 へ 下 つ て 参 ら れ た の で ご ざ い ま す
處 が、 此 の 度 後 小 松 天 皇 御 位 遊 ば さ れ た に 付 いて、 再 び
禁 中 へ お 召 し 出 だ し に 相 な り、 小 町 の 局 と 名 を 賜 は つ て、 忝 な
く も 後 小 松 天 皇 の 御 寵 愛 を 蒙 り 居 る 身 と な つ た、 處 が 程 な く 小 町
の 局 は 御 姓 殿、 然 る に 八 ヶ 月 目 に 目 出 度 く 御 産 の 紐 を 解 か れ て
御 誕 生 遊 ば さ れ た を 菊 麿 公 と 申 し あ げ 奉 る、 此 の 御 方 が 即 ち 後
に 一 休 大 禪 師 と お な り な さ る の で ご ざ い ま す、 之 れ に よ つ て 照

一 休 和 尙

子 殿 は 後 小 松 帝 よ り、 藤 の 侍 従 と 云 ふ 御 名 を 賜 は り、 ま す
お 上 の 御 寵 愛 深 く 相 な り ま し た、 處 が 藤 の 侍 従 の お 心 の 内 で は
侍 妾 が 生 み 参 ら せ た る 菊 麿 公 は、 八 ヶ 月 で 御 誕 生 遊 ば し た が
全 く は 前 の 後 龜 山 帝 の 御 胤 を 宿 し た も の で あ ろ う と、 他 に は
語 ら れ ま せ ん が、 唯 だ 御 自 分 で 然 う 思 召 し て 居 ら せ ら れ る、 其
の 内 に 菊 麿 公 に は 追 ひ 寄 り 御 成 長 遊 ば さ れ、 至 つ て 聰 明 恰 例
で、 大 人 の 方 も 度 々 舌 を 卷 いて 恐 れ 入 る 位 ひ、 實 に 天 賦 の 御 才
智 が あ る か ら、 藤 の 侍 従 殿 に も 大 い に 喜 ば れ、 御 教 育 に な つ て
居 ら れ ま す が、 何 分 普 通 は づ れ た 惡 戯 で、 毎 日 御 庭 前 へ
出 て、 築 山 な ど に 駆 け 上 り、 或 ひ は 木 登 り な ど を 得 意 と し て 居
ら れ る、 然 る に 其 の 當 時 此 の 菊 麿 公 の お 乳 の 人 に、 丹 後 の 局 と
云 ふ 人 が あ つ て、 此 の 人 は 至 つ て お 色 の 黒 い 所 か ら、 丹 後 の 局 と
お 黒 殿 々 と 云 ふ 位 い で ご ざ い ま す、 或 る 日 の 事 丹 後 の 局 は、
例 の 通 り お 庭 先 さ で 惡 戯 を し て 居 ら れ る 菊 麿 公 に 向 ひ 丹 後 の

若様 菊「フム何んぢや 丹「貴方の様に然う悪戯ばかりを成され
ては不可ません、少しお學問遊ばして歌の道にでもお心をお寄
せ遊ばしては如何でございます、兼ねく申しあげます通り
彼の菅原道真公はお歳七年の時の正月十五日、梅の花を御覽遊
ばして、美しや紅の色なる梅の花、阿子か顔にも付けたくぞあ
る」と、斯く名歌をお詠み遊ばした事がございます、又十一歳
の時には同じく梅花を題として、
月輝如晴雪、梅花似照星、可恰金鏡轉、庭上玉房響
と、詩をお作りになつた位でございますが、唐詩は借て置
き、和歌だけは皇國の寶でございますから、少しくお習ひ遊ば
しては如何で…… 菊「フム、其の歌の意味は何う云ふ事ぢや、
丹「然れば、道真公の御幼名は阿子様と申しあげました、處が
お側に仕へて居た侍女共が平常、頬紅、額紅つけて居たのを御
覽遊ばして、ア、美しきと思召して居らせられた所が梅花

を御覽なされ、其の花が紅の様な色であつたから、阿子が顔に
もつけたいと云ふ意味でございます、菊「ウム……然うか、夫れ
位ひの事なら何んでもない、塵はもう少し上手だ、丹「ハイ、左
様でございますか、夫れでは一つ詠んで御覽遊ばしませ、菊「フ
ム、早や出来たぞ、能く聞け、降る雪がぢや、丹「ハイ、降る雪
が…… 菊「降る雪が白粉なれば手に溶いて、黒い顔にも塗り度
くぞ思ふ、アツハ、……何うぢや、名歌であるうが、丹「ヘエ
……」と流石の丹後の局も呆れ返り、ロクく返事もいたしま
せんでしたが、是れが一層の大評判となつて、誰れしも驚かぬ
ものはございませぬ、此の年菊磨公はお年僅かに六歳、實に梅
檀は二葉にして香ばしく、蛇は寸にして其の氣を現はすとかや
誠は珍らしい御才智でございます、處が或る日の事、藤の侍従
は菊磨公を御手許へお招き遊ばして、「さて菊磨公、あなたは天
性才智もあり、天晴れ大人も及ばぬ位ではございませぬが、然

し未だあなたには眞實の父は御存じございませぬ、眞實を云へば云々斯様々々の理由にて、南朝のお嵐である、處が其の南朝の忠臣には、楠正成、新田義貞、名和長年等の面々が、南朝の御爲め飽くまで忠義を盡しました、武運拙くして孰れも此の世を去りました、然るに當北朝は足利氏が私に建てたものであつて見れば、あなたは能く其處を考へて、萬一あなたに御位にお即さなされた時は、南朝の忠臣等をお取り立てにならねばなりませぬ、菊麿公は、深く思ひ込んだる侍従のお言葉に、性來聰明、恰例なる菊麿公は、何にか感ずる事があつたと見えて心の内に、菊「ア、母上には何にかお企てをなされやうと云ふ思召しがあ

るらしいが、假りに南朝北朝と分れて居るとは云へ、今天下泰平に治まる御代に事を起し、人民に迷惑を興へる事は出来な

い、殊に我が神國は神代の昔しより萬世一系の主上の在す國故

譽へ北朝と云へども、等しく神の御末なれば、到底母上の思召

しをお遂げ遊ばす事は出来ぬ、と云つて此の事を母上に申しあげた所が、御婦人の身としてはお判りになるまい、ア、五月

菊「して其楠正成名和長年新田義貞等は、何方へ参りしや侍

先年此の世を去り遠き幽界の冥途へ参りました、菊「其幽界の冥

途とは、侍此世を距る甚だ遠い所でございませぬ、菊「其者に會た

い、藤「妾は女の事でございませぬから、御供は成りかねます、此

儀は借侶でなくば叶ひませぬ、存じます、菊「して借侶には誰

が能い、藤「先づ當時では東山東福寺の住職亮殿司、菊「然らば是

れより直様亮殿司に面會せん」と一旦仰せ出された事は、お止

まりになりぬ、御性質、早速御車の御用意を仰せ付けられ、付

添ひの者を従がへ、彼の東山恵日山東福寺へお入りとなる、其

處で早速住職亮殿司は、支關式臺まで御出迎ひ申しあげ、頓て本

堂へ御案内の上で、兆「ハ、ツ是れは菊麿公には能ふこそその御尊

一 休 和 尚

其れ故遠き所へお供の儀は、何にとも迷惑いたします、去る變り紫野大徳寺には養叟と申す者がございまして、此の者なれば必ずお供をいたす事と存じまするゆゑ、此度の儀は此の者に仰せ付けられては如何でございます、菊「フ、然うか、然らば是れより養叟の許へ参るであらう」と早速大徳寺の養叟禪師の許へお越しと相なりました、すると大徳寺では突然のお入り故、所化番僧などは上を下への騒動をして居ります、直ちに諸々方々飾り付け萬端をして居る其の内に、早や菊鷹公は案内に連れられて本堂へお通りとなり、正面の方に着座遊ばさせられると當寺の和尚養叟大禪師、法衣の袖を掻き合せ、頭を下げて御挨拶申し上げて居る、菊「養叟とは汝であるか、鷹は名和長年楠正成、新田義貞等に面會いたしたきゆる、其の方只今より案内をせよ、養ハッ、こは思ひも寄らぬ御沙汰、早速御供をいたしませうが、然し彼れ等が今居ります所は、現世ではございません、

一 休 和 尚

來、然し何に事の御用でございまするか、仰せ付け下さいまする様願ひ上げ奉ります、菊「フ、兆殿司應は冥途黄泉に在る名和長年楠正成、新田義貞以上三名の者に至急面會いたし度きゆる、其の途案内を頼むぞ、兆「ハッ、其れは」と流石の兆殿司も之れには驚いた、其れは其等でございます、幾ら僧侶の身でも冥途の道案内は出来ませんから、暫時は返事の言葉もなく、ジツと考へて居りましたが、不圖思ひ出したのは、當時紫野大徳寺の住職養叟禪師の事でございす、此の養叟禪師と云ふ人は、ナカ禪家悟道の大和尚で、兆殿司も二三回問答をして敗けて居りますから、今此の菊鷹公がお入りになつたのを幸ひ、此のお方を大徳寺へお送り申して、養叟禪師を困らして遣らうと思ひ付いた、兆「ハッ、仰せの趣は承知仕りました、早速愚僧お供をいたします、管ではございませぬが、御存じの通り當山は、京都五山寺の一つにいたし、殊に勸願所の事とて御用も多忙であります、

一 休 和 尚

幽冥界と申して世界を離れて居ります、
幽冥界へ参らるる事は六ヶ敷ふござ
なされませぬ故、到底其の幽冥界へ
います。菊然うか其れでは佛法修業を
今より當山に在つて佛法修業をいたす
其の儘御所へお歸りが無い、と云ふの
従様の心を考へて、我れは直ちに世を
あるまい、よつて我れは直ちに世を捨
を送らうと云ふお考へで、斯く仰せら
此の事を聞かれて藤の侍従様は大いに
を立て、迎ひに寄越されました、菊
へお歸りが無い、其の内菊公からは、
し上げられ、後小松天皇へ奏聞を遂げ

一 休 和 尚

今はいたし方がないと思召され、早速御許しが下つたから、
愈々菊公には、大徳寺養叟禪師のお弟子となつて佛法を御修
行をなさる、處が秀庵、破凌、鐵梅、木通など、云ふ小僧があ
つて、其の者等と一緒に御修行を遊ばすのに、師の坊養叟禪師
も、菊公と云つて呼びすてにする、と云ふ譯に往かないから、
其處で宗純と云ふ名を付けて、お弟子の中へ加へられました、
其の内、師の養叟は、最早御老年の事故、大徳寺の住職は華叟
と云ふお弟子に譲り、御自分は宗純、秀庵、破凌、鐵梅、木通
と云ふ是れ等のお弟子を連れて、大徳寺中興珠庵と云ふ庵に御
隠居の身となられたのでございませぬ、處が此の宗純は多くある
お弟子の中で、第一番の悪戯者でございませぬ、或る時養叟禪師
が「養宗純や茶碗に水を汲んで参れ」と申し付けますと、「ハ
イ」と返事はして居ますがナカ、立たない、側に居合はす鐵
梅と云ふ小僧を呼びつけて、宗純、鐵梅、茶碗に水を汲ん

一 休 和 尙

で参れ 鐵「へトイ 養「コレ 宗純や硯を此處へ持つて参つて墨を
磨れ 宗「ハイ、秀庵硯を此處へ持つて来て墨を磨れい」と自分
に云ひつけられた用事でも、自分がか立つと云ふ事はなく、座つ
た儘で用事の取次をする、他の小僧は驚いて、是れは大變に用
事が殖へて来たぞ、全で師匠が二人出来たやうなものであると
云つて居る、處が養叟禪師も宗純の頼才には感心なし、特別に
勞はり學問の修業をさせて居られる、宗純は書物を讀ましても
所謂一を聞いて百を悟ると云ふ性質でございませぬから其の記憶
の能いのに養叟禪師も舌を捲いて驚いて居られると云ふ、此の
一席は餘り興味がございませぬが、いよいよ是れから宗純が頼智
頼才を現はしますとお話しは、次席より追ひくと辨じます。

第二席

借ても菊庵公の宗純は、大徳寺養叟の御弟子となつて修業をし

一 休 和 尙

て居られました、或る夜の事養叟和尚は、本堂のお勤めを済ま
して部屋に歸つてお出で遊ばして 養「宗純、私は今勤行して本
堂の燈火を消すのを忘れて来たが、お前あれを消して来て下さ
れ 宗「ハイ長まりました」と早速本堂差して駆け出して行きま
すから、師の坊は隠れて後を踵けてお出で遊ばして見てござる
と、正面は釋迦一鉢、金塗の蓮華があります、すると宗純は片
傍の經机を踏臺にして、ヒラリツツと上に飛び上つた、而して御
燈をフツと吹き消して飛び下ります、師の坊は此の容子を見て
先に歸り待て居られました、斯る所へ宗純は 宗「へエ消して参
りました 養「オ、御苦勞、何うして消さつしやつた 宗「口で消
しました 養「コレ、左様な事をしては成りませぬ、人間の身
軀は汚躰と云ふて汚れがある、其の口の臭い息で、清らかな御
佛の御燈を消すと云ふのは甚だ勿體ない、何故扇子を以つて消
しませぬか 宗「左様でございませぬか、すると口で消すと汚れ

一 休 和 尚

上げ、或は佛陀には經文を讀み其の行ひをいたしま
 す、何故斯う云ふ様にするか、識らぬお方は思ひますが、吾
 々俗人の家でも神明佛陀を大切にいたします、家は、箸など
 を幾通りも拵らへてございます、これは精進の時だとか、是れ
 は魚類を食ふ際のだ、イヤ是れは牛肉鶏肉の時だとか申して
 夫々別けてござります、或る方に伺ひましたら、世の中に清淨
 と申す物は、何んにもございません、穢は清淨なものだと
 申して居ります、總べて尿糞のやうなもの、肥料に使ひま
 す、西洋では然う云ふ物は皆海へ捨てるのだ、和船に乗つて居る
 者が、日本でも海員の方には悉く汽船、帆船、又和船に乗つて居る
 し、臭氣のしない物を以つて之れを最上の清らかな物として、
 物を清める爲めに用ひますのは、一つは心休めかと思はれます
 口が汚いと云ふて師の坊に答められたのが宗純の氣に達らない

一 休 和 尚

ますか、養左様ぢや、宗「へエ」と其の夜は其の儘で濟みました
 が、借て翌朝に相成ります、未明から起き出で、師の坊は
 本堂に在つて讀經に及んで居られます、尤も多くの弟子達も
 背後に従ひ共に看經を致して居ります、然るに宗純だけ只一人
 後ろ向きになつて讀經して居りますから、是れを眺めた養更は
 養宗純、何故其方は後ろ向きになつて居るぞ、宗「ハイ昨夜師
 の坊の仰せに、人間の身軀は汚躰だ、仰つた、其の臭い呼吸
 が御佛にかゝりますと、勿體なうございますから、其れで背後
 向けになつて讀經をして居ります、最もでございます、口をすばめて
 程此の宗純の云はれたのは、最もでございます、口をすばめて
 ツと吹く息は冷たく、口を開いてハアツと吐き出す息は温うご
 ざいます、そこで神明にも佛陀にも、神饌と稱へて供へ物をい
 たします、汚ない息を掛けてはならぬと云ふて、覆面をい
 たし息を掛けられない様にして供へます、而して後で神明に祝詞を

一 休 和 尚

のです、先づ神明佛陀の前の御燈であれば、口で消しては勿體
 ないから、厨子で消せと斯う答めて呉れれば、ハイ左様でござ
 いますか、何うも恐れ入りましたとも云ふが、一人人間の息は
 臭い汚いと申しましたから、斯うは背後向いて讀經いたして居
 つたのでございませうが、師の坊も感心を成されました、處が
 いよいよ明くれば應永七年三月十八日を以つて、御剃髮と云ふ
 事になりました、其處で師の養叟より、早速日野家へ此の事を
 申し上げると、中納言殿にも大いに喜ばれ、乳母のしづと云ふ
 ものを大徳寺へ遣はし、御剃髮の場へお立合せになる、今日は
 宗純様が御剃髮と云ふので、多くの僧侶が本堂へ集まりました
 先づ正面の御佛壇へ燈火を上げ、左右に萬燈を照らして、其處
 に坊さんが居並んで經文を唱へて居る、養叟も今日は大切なる
 儀式であると思ふので、耕の法衣に袈裟をかけ、本尊様の方を
 向て座つて居る、宗純の後方に立ち寄り「養叟無爲眞實報恩者

一 休 和 尚

々々々」と、云ひながら、宗純の頭へ剃刀を當てる、此の時
 難うございませう々々々と、禮を云ふのだが、何うしたものか
 宗純は、黙り込んだまゝ何んとも云はない、其處で養叟禪師は
 少しく聲を張り上げて「養叟無爲眞實報恩者、々々々」と、
 高らかに仰つた、けれども矢張り何んにも仰らないから養
 叟は「宗純、忘れたか」と、仰つた、此の時宗純はズツと
 本堂の中央へ立ち上つた儘、本尊の方へ向つて、些と頭を下
 四邊をシロリと見廻はしながら「宗純、有漏路より無漏路へ歸る一
 休、雨降れば降れ風吹かば吹け」と、聲朝かに歌を詠まれた、
 養叟禪師は之れを聞かれて、ハッタと小膝を打ち「養叟、ア、宜
 哉、一休、天晴れであるぞ」と、稱讃いたされた、一山の僧侶
 一同も手を打つて感心をいたし、皆口々に一同實に宗純殿には
 恐れ入つた、此のお方こそ、生長の後は當山の宗風を天下に輝
 かすべき者だ」と、讃め褒めやし、頼て其の内に御剃髮も済むと

此のお歌によつて世の中の人々が、一休様々々と申したのでござ
 います、此の歌の意味は始めにも一寸申しあげましたる通り、
 世の中は旅の中の一休み位なもので、誠に人間は果敢ない者だ
 と、云はれた、是れ禪家悟道の第一でございませう、借て宗純も
 いよいよ剃髪いたして、姿が變りますと、最う皇子様である
 うと平民であらうが、然う云ふ事は無頓着でございませう、朝も
 早やくから起き出で、庭の掃除や水汲み、是れは僧の八役と
 申し種々の用事がありまして、日々夫れ等の事をいたして居り
 ます、處が或る日、商人体の男一人眞珠庵の玄關に歩つて参り
 まして、商「へいお頼み申します」と、案内を請ふた、丁度其
 處に居た宗純は、宗「へい、お入來なさい、誰様でございませう、
 商「へい私しは濁川通の其の先の、底抜け柄杓町、子の子の左
 衛門の方から参りました、明日は亡父の三十三回忌でございま
 すから、何卒御参詣をお願い申します、是れは甚だお粗末でこ

さいます」と、お鏡餅を一つ其處へ出した、宗「へい長まりました、
 した、今日は和尚様がお留守でございませうから、歸られましたら
 ば、左様に申します、商「夫れでは宜しう願ひ申します」と
 と、使ひの者は立ち歸つた、處が此の鏡餅と申して、お供へに
 色々類のある事でございませう、一重と云へば二つなければなり
 ません、夫れに二升か一升五合ばかりの餅がタツタ一個、外皮は
 は風が當りますから固くなつて居ります、内皮は未だ柔か
 くつて美味そうでございませう、幾ら宗純が伶俐でも未だ子供で
 ございませうから、何うも食べたくて仕方がありません、宗「ヨシ
 ツ師の坊のお歸院なさらない内に、一つ食べて遣らう」と、出
 雲の大國主神見たいな風で、大きな圓い餅を抱へてポツ／＼と
 り始めた所へ、○「御歸院」と威勢よき聲を先に立て、玄關
 の方よりお昇りになつた師の坊、今しも廊架を傳ふてお出でに
 なる、宗純は其の聲を聞いて驚ろいたものを見へまして、餅

が咽喉へ詰つた 宗「アン……」と言ひながら眼を白黒させて
苦しがつて居る、此体を眺めた一人のお小僧、宗純の後へ廻つ
て、春中を一つボンツと打つた、漸く咽喉へ通つたが 宗「アッ
お歸り遊ばせ」斯うなると叱るに叱られませんが、此の体眺めて
師の坊は笑ひながら 養「十五夜の月は満圓なるものを……」す
ると宗純は己れの腹を指して 宗「雲隠れして此處に在ます」
と、答へました、師の坊は尚も笑ひながら 養「コレ宗純や、其
れは何うしたのぢや 宗「へい先刻濁川通の其の先の、底抜け柄
杓町、子の子の左衛門の方から、使ひが参りまして、明日は亡
父の三十三回忌に相當いたしましたから、何卒御参詣を願ひます
之れは粗末なと申して置いて歸りました、和尚様へ差し上げ様
と思ひましたか……若しも腐敗つて居つては不可ぬと思ひ、一
寸私しがお毒味をいたしたのでございませう 養「フム……左様か
其餅は其方等に遣ります、皆な一同で分けて食べるが宜しい、

宗「へい有難う存じます、オイ秀庵鏡餅を買つた 秀「ア、宗純
は徳だナア、我々が彼の様なことを仕やうものなら、何んなに
叱かられるか知れやアしない、有難いッ」と、弟子共打寄り、
喜んで餅を分けて食へて仕舞ひました、偕ても養「叟禪師は宗純
を一間へ招かれて 養「時に宗純や、今其方が申した、濁川通り
底抜け柄杓町と云ふ所は、此の京の町にない筈ぢやが、一体何
處であらう 宗「お師匠様、あなたは是れが解りませんか 養「フ
ム何うも解らん 宗「濁川と申しますは、大雨が降つて一時に
水が出ますと、川が濁ります、其處で今出た川ぢやと云ふので
これは今出川でございませう 養「フム成る程底抜け柄杓町と云ふ
のは何處ぢや 宗「是れは柄杓の底を抜いて御覽なさいまし、底
が抜けて仕舞ひますと、柄杓側とが残りますから、江川町で
ございませう 養「フム其れも解つたが、子の子の左衛門とは何
んぢや 宗「子の子の代になつたら孫でございませう、其處でこ

れは孫左衛門でございませう。養一、其の夜はお寝みになつて、偕て
 明日は参詣をして遣らう」と、其の夜はお寝みになつて、偕て
 翌朝養一和尚は、鼠色の法衣に木藍染の袈裟、宗純は墨染の法
 衣に同じ袈裟、下僕の忠助は紺色に萌黄の梵天帯、三人連れ
 で、大徳寺を出て今しも今出川通りの橋を渡らんとすると、橋
 の雨側の所に青竹を立て其れに繩が引張つてございまして、上
 から薄い札が一枚ブラ下つて、「このはしわたるべからず」と、
 平假名にて書いてあります。夫れを御覧になつた養一和尚は、
 養一、これは困つた、此の橋渡るべからずとしてあれば、是
 れは一條戻り橋の方へ廻はらねばなるまい、のう宗純や、宗
 エ戻り橋へ廻はるに及びませぬ、宜しうございませう」と、宗
 純は先きに「ヨコ」と橋を渡つて、宗一、へいお師匠様、渡つて
 も大丈夫でございませう、なるだけ真ん中の方を渡つてお出でな
 さいませ」と、手招きをする、養一和尚は宗純の云ふが儘、

所なく忠助を連れて、漸やう今出川の橋を渡つてお出でになる
 と、成る程江川町と云ふ所がございませうから、養一、此處
 ぢやな、宗一、へい此處でございませう、養一して孫左衛門と云ふ者の
 宅は何處であるか、尋ねて見よ、宗一、へいお師匠様、尋ねるに及
 びませぬ、直分ります、サア斯うお出で遊ばせ」と、出て來て
 見ると、傍へ家の門口に少々な鉈が突き差してあるから、宗
 一、へい御師匠様、孫左衛門の宅は此處でございませう、養一、
 尋ねもせず何うして分つた、宗一、門口に小さな鉈が出してあり
 ます、小さな鉈です、サアお入りな
 さいませ、養一、宗純や、何うもお前の頼才には實に驚いた」と、
 今既に其の家へ這入らうとする所、當家の主人孫左衛門が門口
 に出迎ひ、孫一、へい、眞珠庵の和尚様には、御苦勞でござい
 ます、サア何うか此方へお入り下され」と、挨拶終り、而し
 て宗純に向ひ、孫一、あのあなたが、お小僧の宗純様でございませ

一 休 和 尚

か 宗「ハイ左様 孫「あなた方は今何處からお越に成りました、
 宗「ハイ……何處と申して……矢張今出川通りの橋を渡つて参
 りました 孫「あゝ左様でございますか、あの橋の向詰に何にか
 書て有りはいたしませんでしたか 宗「ハイ假名でこのはしわた
 るべからすと記した木札が吊してありました 孫「其れに貴方は
 何故お渡りなされたか 宗「渡ることも橋なき時は行けぬなり、
 橋を越すとも端を通るなどか申して、物のハシは端の字、渡る
 ハシは橋の字、物を食べるハシは竹冠りに者の字、いづれもハ
 シと訓めど音の抑揚に因つて差あり、彼の橋は欄干が朽ちて居
 るから、端の方には危険故通るなど云ふことを記せしもの、若し
 彼の橋を渡らず後戻りをしたならば、貴方は笑はうと云ふ計略
 此の宗純は其の手は食ひませぬ」と、是れを聞いた孫左衛門は
 ホト／＼感心いたし 孫「イヤ何うも是れは恐れ入りました、サ
 ア／＼何うぞお通り遊ばせ」と、奥座敷へ通し、懸て佛前に於

一 休 和 尚

て讀経も了り、數多親類共も来て居りまする、先づ其の上座へ
 養父禪師、次に宗純、夫れから親屬の人々が皆順々に列んで居
 ります、亭主孫左衛門は衣服を更ため、其の席へ出まして 孫
 エー皆様、今日は御苦勞様でございます、粗酒ではござります
 が、何卒和尚様からお香をお取り遊ばして下さいます……ア、
 宗純様、あなた様は大層御伶俐な方です、何うか其の御飯の椀
 の蓋を取らず、お汁の椀の蓋も取らずにお食ひなすつて下され
 ました 宗「へエ／＼頂きますでござります、ア！今日は結構な御
 法事でござります、御宅の額面は好く出来て居りますな、孫へ
 エ……宗「王義之でござりますか……ア、此方の軸は珍南嶺、
 何うも結構に出来て居ります、天井は悉く薩摩杉でござります
 庭の手水鉢は花崗石でござりますか、格外古い物でござります
 な、孫「へエ前々からござります、宗「お手水鉢の割合に燈籠が新
 しくござりますな、孫「彼れは昨日購めました、宗「何うもお庭の

樹木は悉くお手入れが結構でございますな、ア、色々拜見して
 居りますうちに、切角のお汁が冷めました、恐れ入りますが一
 ずお盛り替へをして頂き度うございます……ア、モシク、蓋を
 取らずに何うか其の儘でお盛り替へを願ひます』と、云はれて
 困つたのは京屋孫左衛門、膳部を其の儘下げ、蓋を取り除け
 孫「何うぞ召上り下さりませ 宗ア、蓋がございませんな、こ
 れでは誠に食べようございませぬ」遂に宗純は蓋も自ら取らずに
 御馳走になりました、其の日は其の儘で歸つて参りました、孫
 左衛門は小坊主の宗純に遣られて、忌々敷くつて仕様がござい
 ません、何うかして一つ宗純を苦しめて遣る工夫はあるまいか
 と、朝飯が済んで考へて居ります處へ、シクシク涙ぐんで泣入
 つて参りました老婆のお由、それを見るより孫左衛門は孫「オ
 、其處へ来たのは、ヨシではないか 由「昨日は大きに御馳走様でござ
 んだ、泣いたり何かして……」

いたしました 孫「イヤ何んの……昨日は種々使ひ立て、濟まなかつ
 たな 由「イーニ何ういたしましたして、旦那様昨日は大旦那様の御
 法事を了り、お暇を頂き宅へ歸りますと、大事にして居た四
 十雀の雌が死んで居りましたので、今朝方何處かのお寺を頼ん
 で、葬つて貰はうと思ふて居ります 孫「ハ、ア其の四十雀が死
 んだので、お前は泣いて居るのか 由「ハイ左様でございます、
 孫「宜し、其れでは私が一ツお供物をして遣るから、此の箱
 の中に其の死んだ鳥を納めて、大徳寺の眞珠庵へ持つて行き蓋
 所へ廻れば、此の鳥の引導を渡して呉れと頼むのぢや、何う言ふ
 に逢ふて、此の鳥の引導を渡して呉れと頼むのぢや、何う言ふ
 引導をするか能く聞いて歸つて呉れ、少し私の方に考へが有る
 由「ハイ畏まりました、何うも有難うございます」と老婆の
 お由は、早速に右の箱の中へ小鳥の死んだのを入れ、其れを携
 へ大徳寺の中眞珠庵へ歩つて参り 由「ハイお頼み申します 宗

「トーン……」由貴方様は宗「拙僧は宗純と申します。由左様でございませうか、妾は京屋孫左衛門方の番頭伊助と申す者の母でございませう、此の鳥が今朝方死にしましたが、何うぞ結構な御引導を御願ひ申し度うございませう。宗「ハイ畏まりました、お易い御用です、サア何うぞ此方へお通り下さい」と老婆を案内して本堂へ連れて通ると、丁度其處に居合はして居た、秀庵、木通の二人は、互ひに顔見合はせ、心の中に二人「宗純が何んな事をするで有らう」と後から尾行て来て見て居りますと、此の時宗純は、師の坊の拂子を携へ、本堂の正面へ右の箱を据へ置いて、エヘンツと咳拂ひをして、最も嚴格に姿勢を正し、宗「抑々萬物の靈長たる人間ですら、一生は僅かに五十年、然るに鳥類の身を以つて、四十からとは生過ぎたり、喝ッ……サアこれで宜しい」と言つた、傍で聞いて居た秀庵、木通は無茶な引導も有るものぢやと、呆れ返つて居りまする、老婆のお由は驚い

て逃げ歸り、京屋孫左衛門に云云斯様くと話しをした、するど孫左衛門は感心いたし、孫「ハテ偕て彼の宗純は今に來い者になる哩」と非常に驚いて居りますると言ふ、サアこれから宗純がおひく頃智を現はしますとお話しは、次席に申し上げます

第三席

斯くて其の年の冬の事でございませうが、大徳寺眞珠庵にてはお弟子が皆々集つて、俗に中振と申す羅刹を洗つて居ります、所へ門外より雲水の僧が一人歩つて参りました、すると惡戯小僧の宗純は「宗「オイ、あの雲水は問答に來たのに違ひないから、皆物を言ふな」と朋輩の者等に口止めをして居ります、すると僧は近寄つて参り、僧「コリヤ小僧々々」と横柄に呼んで居ります、小僧「誰一人返事するものがございませう、僧「これは仕たり、小僧」と云ひながら猶も近寄つて参りまして、宗純の

確かに男の子が生まれると、吐かしやアがつたそうだが、今朝
 分宛だのは女の子だ、坊主は何んでも嘘を吐かないと聞いて居
 るが、何んで嘘を吐きアがつたのだ、此度は、一命だけは助け
 て遣るが、以後慎め、是れから彼様な嘘を吐きアがると擲り殺
 して仕舞うぞ」と云はれ宗純は一寸も驚かず、忽ちクルソと法
 衣の裾を掀り、蹴立に成り手で歩いて居ります、之れを眺めた
 善兵衛は、怒つたの怒らないのでは無い、善ヤイ小僧、何を仕
 やアがるんだ、太い奴だ」と、怒つては見ましたが、真逆に相
 手が相手だけに手出しもならず、只だく悪口を吐いて歸つて仕
 舞ひました、折りから奥の間に在つて師の坊の聲として、師「鐵
 梅く、鐵へイ、師「何んぢや、表でワアく、噪いで居るのは、
 鐵「バツ、御師匠様、少しお叱り成さぬと不可せん、師「叱
 れどは誰れを……、鐵「あの宗純をでございます、昨日雲水の僧
 が一人やつて参りまして、小僧小僧と申しましたら、丁度其の

安心なさい、屹度御亭主様もお喜びでございますませう、女有難う
 存じます、定めし良夫も悦ぶでございますませう、是れは甚だ御疎
 末ではございませうが、何うかお納め下さりませ」と金子若干を
 紙に包んで差し出した、宗「イヤ斯様な御心配に預りましたは恐
 れ入ります、これは折角のお志、受納いたします」と紙包みを
 懐中に入れて仕舞ひました、善兵衛の女房は悦んで立歸りまし
 た、其の後で、秀「オイく、宗純、何にを貰つた、宗「また後で何
 にか買つて遣るから、待て居れ、秀「オイ今買へく、宗「ウムヨ
 シく」と落着いて居ります、傍の者も取り上げると云ふ聲に
 はゆかず、只だ吃いて居りました、其の日も暮れて仕舞ひ、翌
 日丁度朝の御飯の濟んだ時分でございます、門外から荒々しく
 く這入つて来た丸屋善兵衛、丸「ヤイ、此寺に宗純と云ふ小僧は
 居るか、宗「純は私しでございます、善「アム貴様が宗純坊主か
 太い奴だ、人を馬鹿にしやアがつて、昨日乃公の女房が来た時

すると宗純は裾を掴つて、立になつて歩いて居りますから、善兵衛さんは大變怒つて悪口たら〜でお歸りになりました、些とお叱り成さるぬと不可ません、逐一聞いた師の坊は、師「ブム、然うか、それは宗純の計ひは感心な事ぢや、其れが所謂佛法の方便である、腹の内の子が女兒か男兒か判るものではない、善兵衛殿も男兒でも女兒でも、我が兒の可愛さに別に變りはない、が、孰れかと申せば男の兒が欲しい故そんな事を云ふたのだ、畢竟申せば我が儘な事ぢや、所で妻女は其れを心配して心を痛め、先月のものが今月迄延びて居たのだ、其れを宗純が推察して、男の兒でござると云つたのだ、妻女は其れを聞いて安心して、氣分が快く成つたから今朝出産したのぢや、之れは嘘ぢやが人を喜ばし、安産をさすれば母子の命も助かる方便の一つぢや、中々其方達には分るまい、ア、宗純はゑらい奴ぢや、鐵「へエ、けれども逆さまに歩いたのは、是りや何う云ふ譯でございます、

時中、扱を洗つて居る時でございました、大根小さしと雖も小根とは云はず、小なるとも出家に向つて小僧とは如何と申します、と、何うしたものが、僧は驚いて逃げ歸つて仕舞ひました、大根の字の異うた講釋などをして居ります、其の處へ丸屋善兵衛さんの御案内さんが來まして、和尚さんに會ひたいと云つて居たのを、何んな用か知らねども和尚さんでなくとも私しがと申して、御案内さんのお腹を壓へて、是れは男の子に違ひない、と申して、師「一體鐵梅、其りア何んの事ぢや、鐵「イヤ、其の實は、善兵衛さんの御案内さんがお腹が大さく、若し女の子を産めば踏み殺るして仕舞う、男の子を産め然うしたら褒美を道ると云はれたそうで、其れで心配されて和尚さんに男の子か女の子か、見て貰ひに來たのを、宗純がそんな事を云つて歸して仕舞ひました、所が今善兵衛さんが來られて、今朝産れたのは男の子ぢやアない、女の子だと云つて大層怒つて居りました、

師「それは逆さまに立つたのは、變生男子なら結構であろうと云ふ事を見せたのぢや宗純はナカク、威心な奴ぢや」と、師の坊は大變お説めなされて、少しもお叱りにはなりません、然るに此の八宗兼學の中でも、眞言宗或ひは禪宗などは、宗門の徒が八釜敷うございまして、ナカク、表面では魚類などは一切食べざる事は出来ません、然りながら此の禪宗坊主と云ふ者は、始終問答をいたしまするに、腹力を付けて置かなければ、發聲するに息が續きません、其處で内密で魚類を食して居たのでございます、其れで養叟和尚は、弟子小僧に知れない様に、夜増の者が寝静まつた所を考へて、コツソリ魚類を食して居られました、處が或る處、弟子小僧は残らず床に這入り、眠りに付いて居りました、中にも宗純は夜半に目を醒まし、小便に行かうと椽側を通りかよりますと、アーンと魚を焼く香ひがいたしました、宗「ハテナ、是れは不思議な事であるわい」と、思ひな

がら師の坊の居間先まで参り、襖の隙から内を覗て見ると、師の坊は圍爐裡の中で蛙の鹽引を焼てムシヤク食して居られる其れを眺めた宗純は、何にか心に點頭き、ワザと椽側をバタバタツと足音をさして、忽ちバツと襖を開いて、宗「へい、お師匠様、何にか御用でございますか」不意を喰つた養叟和尚は吃驚して、鹽引き蛙を傍に隠し、養「コレ」宗純、何にしに参つた、宗「へい、宗純々々とお呼びになりましたから、参りました、養「イヤ、恐僧は何んにも呼びはせん、宗「ア、左様でござい、今あなたの方へお隠しになりましたは其れは何んでござります、養「早や見付けたか、何うも目の早やい奴ぢや、是れはな、他より到來したる蛙の鹽引きぢや、宗「へい……夫れは何んな木に出來るのでございます、養「イヤ、木に生るものではない、こ、れは魚類ぢや、宗「ア、魚類でございますか、其れは食へても能

いものでございませるか 師「イヤ、僧侶は決して魚類肉類は食する事はなりません 宗「でもお師匠様は…… 師「私しはこれに引導を渡して置いて食します、汝は佛法僧と云ふものを識つて居るか 宗「へエ何んな鳥でございます 師「イヤ、鳥ではない、佛はホトケ、法はノリ、僧は吾々を云ふのぢや、其の佛の御利益、法の有難いのも、我々僧がなければ其れを衆生に説き聞かせる者がない、其の僧も若い時分は宜しいが、だん」と私しの様、年を老つては、自然に腹力が薄く弱くなつて来て説教する事も法を説く事も出来なくなる、其處でこれに私しが引導を渡して置いて、薬に代へて用ひるのぢや 宗「へエ……、左様でございませるか、其の引導は一体如何なのでございます 師「汝元來枯木の如し、再び水中に放つと云へども泳ぐ事能はず、よつて恐僧に服せられて佛果を得よ、喝 宗「有難う存じます、何うおぞ就枕遊ばせ」と、一禮述べて我が居間へと引き退ります

した、斯くて其の翌日の丁度正午頃でございませぬが、お弟子の波凌木通の兩人が慌たしく師の坊のお側へ駆け込んで参りまして、兩「へイ、和尚様、大變でございませぬ、何うか早やぐお出で下さいませし 養「何んぢや、慌だしい大變とは何ういたしたのぢや 兩「何ういたしたとごころの騒ぎぢやございませぬ、今宗純が真ッ裸になつて、裏の蓮池へ飛び込み、大きな鯉を引籠んで来て、臺所の組板の上に乗せて、切りに鱗をとつて居ります、早やぐお出で下さいませし」と、聞いた養叟和尚も之れはと驚ろき、早速臺所へ駆けつてお出でなされて 養「コリヤ、宗純其方は生ある者の生命を取るとは、怪しからん事をするぢや、宗「へ……、和尚様、尋即佛法僧を御存じですか、佛法僧と云ふて鳥ではありませぬ、佛はホトケ、法はノリ、僧は我々を申します、僧が無ければ説教する事も衆生を濟度する事も出来ません、尊師の様に年を老りますと身体が堅固でありますが、私

し共の様な幼年のものは腹力が弱はうござります、其れ故精々肉食をいたしまして腹力を強うしませんければなりません肉食は僧侶の禁物でござりますが、然し私しは是れに引導を渡して食します、養「エ……何んと云ふ引導を渡した、宗「汝元來生木の如し、水中に放てば能く泳ぎ去らんと欲す、濁れる池中に遊ばんより、寧ろ愚僧の腹中に入つて糞となれ、喝「之れには養更和尚も驚ろいて仕舞つて、一言半句も云はず其の儘奥の一間へお遣入りと相なりました、處「が其の後養更和尚は、最う宗純には迂濶な事は云はれず、殊に香ひのするものは食する事は出来ないと、密かに蜂蜜をお求めになつて、夜中密かにチヨネ坊「替めて居らせられる、すると宗純は又考へた、宗「ハ、ア師の坊「蛙で失策つたから、何にか道つてござるな、ヨシツ、一つ様子を見て遣らう、と、ソツと寢床を脱げ出で、師匠の居間に來たつて唐紙の隙間から覗いて見ると、養更和尚は寢ながら

少さな壺を引寄せ、頻りに蜂蜜を嘗めて居らつしやる、宗「純は襖を開いて内へ飛び込み、宗「へイ御師匠様何に御用でございます、養「ヨリヤ宗純、其方は時々愚僧を威嚇すな、何んにも呼びはせぬ、宗「へエ……然うでございますか、時に御師匠様、今其方へお隠しになつたのは何んでございます、養「モウ見付けやアがつた、是れは蜂蜜ぢや、と、小さな壺を前へお出しになつた、宗「御師匠様、是れは何んでございます、養「コレはな、蜂蜜と云ふ鳩毒ぢや、宗「エ、ソ御師匠様あなたは毒を呑んでお死になさるのでございますか、養「誰れが毒を呑んで死ぬる奴があるか、宗「けれどもあなたは毒ぢやと仰つたではございませぬ、か「養「チア此の蜂蜜と云ふものは元來藥になるものぢや、愚僧の様な年寄が嘗めると、大きに腹力を増して身体健康になるのぢやが、だが然し二十歳未満の少年が嘗めると、却つて毒になつて死んで仕舞うのぢや、宗「へエ……然らすると我れくの様

な子供が嘗めると直死にますか 養オ、然うぢや、必ず嘗める
ことは出来ませんぞ 宗「へい左様ならお寝みなさいませ」と、
其の儘自分の寝床へ下がつて来ましたが 宗「何んの蜂蜜を嘗め
て死んで堪るか、アレは薬もく、大の薬ぢや、ヨシッ、あの蜂
蜜を嘗めて師の坊を驚かして遣らう」と、考へた、サア是れか
ら宗純が如何なる事をいたしまするや、そは次席に於いて相解
ります……。

第四席

借ても養叟和尙は、蜂蜜を鳩毒だと云つて胡魔化したが「よも
や是れはよう嘗めまい」と、其の夜お寝みになつて翌朝、所用
があつて何處かへ出て行かれました、其の後を考へた宗純は
是れから師匠の居間へ行つて、彼の蜂蜜を残らず嘗めて遣らう
と歩つて来て、遠ひ棚の開きをあけて、取り出した件の小蓋、

蓋を取つて指の先に付けてチヨネく、嘗め始めた 宗「ア、美味
美味、何んの此の蜂蜜を嘗めて死ぬものか」と遂々悉皆嘗めて
仕舞ひ、まだ之れだけでは師の坊を驚かす譯には往かないと、
お居間の机の上に置いて在る、自然石で拵らへた虎形の硯石、
之れは其の頃室町御所に在らせられる、足利三代將軍義満公よ
り、御拜領をしたる品にいたして、眞珠庵の寶物になつて居り
ます、夫れを持つて庭先沓脱ぎ石の處へ歩つて参り、ワザと石
に叩き付けて粉微塵に打ち割つて仕舞ひ、而して自分はモウ師
の坊が歸つて来る時分を計つて、お居間の遠ひ棚の下へ這入つ
て、メソく泣いて居ります、所へ頓ての事に養叟和尙は御歸
院になつた、すると秀庵、木通、波凌三人のお弟子は玄關にお
出迎ひ申しあげて 三「へいお師匠様、お歸院く」と、御挨拶
をして居る、養叟和尙は御覽になると、自分が愛して居るお盆
に入りの宗純が其處に居りませんから 養「コレ皆の者、宗純は

一 休 和 尙

何うした一同へい我れくは朝起きますと、夫れく掃除を
 いたしまするに、各自持ち場がございます、宗純は師の御坊の
 お居間を、掃除する役ですから、掃除をして居るのでござりま
 せう、養フ、ム然うか、けれども其様に掃除が何時まで暇ざる
 譯がないが、何うしたのであろうと、云ひながら、居間の唐
 紙を開けて、内へ這入つて御覽なさると宗純は、違ひ御の下で
 フアくと聲を上げて泣いて居りますから、養ニレ宗純や、そ
 なたは何んで其の様に泣いて居やるのぢや、ハ、ア解つた、是
 れは何んぢやな、お前は日頃同じ弟子の中でも、忍僧が特別に
 可愛がるによつて、鉄梅、木通、秀庵等が妬み嫉んでお前を苛
 めたを、口惜しいとでも思ふて泣いて居やるのであろう、宗イ
 エく、私しは滅多に苛められはいたしません、養そんなら何
 が悲しくて泣いて居るのぢや、宗へいお師匠様、誠に済まぬ事
 をいたしました、ツア〜〜……、養ニレ〜、譯も云はず

一 休 和 尙

に泣いて居ては仕様がな、一体済まぬ事とは何うしたのぢや
 宗へいお師匠様が今朝未明に御所用があつてお出ましになり
 ましたから、其のお留守の間に、例の通りお居間の掃除に参り
 ました、處が御机の上にお硯石が置いてありましたのを見ると
 大變墨の固まりなどが付いて、汚なくなつて居ります故、之れ
 も序に洗ひ奇麗にして置かうと存じ、沓脱ぎ石の處へ持つて参
 りまして、其れを洗はうとする途端の拍子に、手が滑つて沓脱
 ぎ石の上へ取り落とし、あの通り粉微塵に毀して仕舞ひました
 養「エ、ツ、宗純お前は夫りア何んと云ふ事をして呉れた、あ
 のお硯は足利三代將軍家より、御拜領に及んだ大切な品ぢや、
 夫れを打ち毀すとは、るらい事をして呉れたな、宗夫れ故何ん
 とも申し上げ様もございませぬ、何れお師匠様がお歸院遊ばし
 ましたら、何の様にお叱りをお掛けな、死んで仕舞う方が増しかと死を決し、
 層お歸院にならん内に、死んで仕舞う方が増しかと死を決し、

一 休 和 尚

益り死ぬのも見苦しい、又及物で咽喉を突いで死ぬのも痛うござりますから、先夜お師匠様より承はりました、鳩毒を舐めまじたら、樂に死ぬると思ひ、小壺を取り出し蓋を除つて、指に磨塗つて嘗めて見ましたが、何うも死なれません、是れは一寸嘗め三嘗め四嘗めと嘗めて嘗め位いでは逆でも死ねんど、二夕嘗め三嘗め四嘗めと嘗めても未だ死なれません、是れは一層嘗めたら死ねやうかと、遂々悉皆嘗めました、未だ夫れでも死なれません、お師匠様、モソツと蜂蜜はございませんか、ワア〜と大騒ぎ上げて泣き出した、イヤ早や養叟和尚は驚いたの驚かないのではございません、養「ヤイ宗純、何んの蜂蜜を嘗めて死ぬものか、アレは全く大の薬ぢや、宗「サア然う仰在ると、大層腹力が付いて来たやうに思ひます、アツハ、、、養「ヤイツ、何んだ泣いたり笑ふたり、愚僧を馬鹿にするな、彼方へ行けッ、宗「ヘーイツ」と其の儘自分の居間へ下つて来た、サア斯の如く宗純は、何時

一 休 和 尚

も〜所謂臨機應變、其の時に當つて當意即妙の頓智を現はし衆人の耳目を驚かして居りました、然るに師の坊養叟は、ツク〜思へらくは、これ迄宗純を一人で他出をさせた事はございませんが、最早他へ出して大事あるまいと、或日宗純を手許へ招かれ、師「コレ宗純や、お前御苦勞だが今日は東福寺まで、使ひに往つて来て呉れ、宗「ヘーイ畏まりました、師「此の手紙を持つて行つて、直々返事を聞いて来るのぢや、宗「ヘーイ左様なら行つて参んじます、と大徳寺を立ち出で急ぎ伏見街道東福寺へ歩つて参り、彼の有名なる通天橋を眺めて、東福寺の玄關の方に来り、宗「お頼み申します……取次「ドレ……宗「紫野大徳寺より参りました、此の手紙を……何うぞお返事を頂いて歸ります、取次「少時これにお扣へ下さい」と宗純を玄關に待たせて置いた、執次の僧は師の兆殿司の居間へ参り、彼の手紙を渡しました、兆殿司は披いて御覽なさると、

憎くき奴と思ひましたから長敵と見て轡を巻くは如何宗天
下太平く」と答へて其の儘急いで大徳寺へと立ち歸つて参り
宗「ハイお師匠様只今歸りました師「オ、宗純か御苦勞く、
何うであつたな宗「御書面の趣悉細承知いたしました、いづれ四五
日の内にはお目に懸つて、其の節萬々お話し申そうと、斯様で
ございしました師「フム……左様か、只だ其れ丈であつたか宗「
御用は其れだけでござりましたが、殿司様の仰在いますには、
お前の師匠養叟禪師は妻帯されたそうだが、眞實かと申されま
した師「フム何んと云ふた宗「ハイお貰ひなさいました、御中
膳じう近々お子が出来ますと申しました師「此れは怪しからん
事を申す宗「左様申しましたら、嫁は何處から貰つたとお尋ね
でございしましたゆへ、東福寺の殿司様のお娘御だと申したら、
吃驚して何に事も申されせんから歸らうとする途中で、學頭
殿長に逢ひました、問をかけられては面倒だと思ひましたから

掛給を隠して居りましたら、敵と見て轡を巻くは如何と問掛け
ました、そこで黙止つても歸れませんから、天下太平と申しま
したら、妙な顔をして、其のまゝ彼方へ行つて仕舞ひました、
あの鹽梅では別に東福寺には、大した學者は居らぬ様でござい
ますな養「コレ／＼宗純、其様な事は必ず云ふものではない、
然し今日は大いに御苦勞であつた、次問へ下つて休むが宜しい
宗「ヘエ……」と己が居間へと下つて来る、後ろ姿を御覽にな
つた養叟禪師は、口には云はねど心の内には何うも此の大徳寺
には今にゑらい者が出来るわいと、大いに感心をして居られ
る、然るに其の年冬の事でございしましたが、同宿の小僧達が打
集まり「オイ／＼鉄梅、今夜も又遅くまでは寝られないな鉄
然うだ波瀾、徹夜をせねばならぬとは、お互ひに困まるぢやア
ないか」と皆口々に話して居る所へ、出て来た宗純は「宗「オイ
皆が今夜は寝られんとは、一体何う云ふ理由なんだ秀「アア宗

織物業を學び、廿五歳の時日本へ歸つて來て、此の織物を擴め
 たのが、方今西陣織の元祖でございませう、竹齋老年に及び、養
 叟禪師のお弟子と相成り、大層禪學に熱心をして居ります、
 が竹齋は至つて園茗が好きで、又非常に強い、養叟禪師も園
 がお好きで在つしやる、其處で同氣相求むるとても云ふので
 ざいませうか、大抵三日目か五日目の晩には、日を定めて大
 寺へ碁を打ちに遣つて参ります、打ち始めると兩方とも夢中
 になつて、夜の更けるのも知らず、挑み合ふのが例になつて居
 ります、所謂碁敵は憎くも憎くし懐かしやとか申しまして、
 丁度其の晩が約束の日でございませうから、眞珠庵へ出かけて
 來ました、處が此の竹齋老人は若い時分、朝鮮へ行きました時
 何んの皮だか確とは分りませんけれども、餘程珍しい皮だと
 云ふので、其れを買ひ求め、日本へ持ち歸つて來て、其の皮で
 羽織を拵らへ、夫れを自慢で着て歩いて居ります、其の皮で

純にお前も知つてゐると、例の織屋竹齋が來る晩だ、彼奴
 が來て碁を打ち始めると、何日も徹夜だ、夫れで皆が寝られな
 いから困つて居るのだ、宗成る程昔が苦情を云ふのも最もち
 や、夫れでは乃公が一番、以來竹齋が夜碁を打ちに來ない様
 して遣らう、波して其の竹齋が來ない様に、何う云ふ
 趣向だ、宗「アに何う云ふ趣向も斯う云ふ趣向もない、紙と筆
 さへあればよいのだ、誰れか此處へ持つて來て呉れ、」ヨシッ合
 點だ、と、筆と紙とを其の處へ持つて來て呉れ、宗「ヨシッ合
 取つて、件紙へ、」一つ當山内へ皮の類所持の者、一切立ち入
 るべからず、と筆太に書いて、宗「ア是れを表門柱の處へ貼つ
 て置け、」と貼らして置いて、織屋竹齋の來るを今か〜と待
 つて居る、借て此處に織屋竹齋と云ふ者があります、此の者
 父は朝鮮人にして、母は日本人、長崎圓山の遊女だと申す事
 ございませう、此の竹齋が幼少の折、朝鮮や支那へと渡り、

も餘程寒いので、例の皮羽織を着て、先夜負けた復讐をしやう
と、竹齋老人は勇みに勇んで歩つて参り、大徳寺の御門は難な
く内にと這入り、今しも真珠庵の御門に差しかゝつて来て、ヒ
ヨイツと見ますと、何にか貼紙がしてあるから、竹ハ、ア何
にが書いてあるのだ」と、側に近寄つて見ますと、「一つ當山
内へ皮の類所持の者一切立ち入るべからず」と、誌してあるを
見て、縁屋竹齋は「竹ハテナ今まで此の真珠庵へ来て居るけれど
も、當山内に皮の類所持の者立ち入る事ならんなど云ふ事な
い筈ぢや、夫れに今宵に限つて此の貼紙がしてあるのは、何う
も合點が往かぬ、然し乃公は皮羽織を着て居る以上は之れを犯
して這入る譯にはいかん、是れは今夜は出直して又更めて出直
す事にいたさう」と、其のまゝ元來し道へ歸りかゝるを、門の
蔭より見て居た多くの弟子達一同「旨まい、遂々宗純の貼
紙を見て竹齋爺も、這入らずに立ち歸るか、其れ笑つて遣れい

五五
と、一同が大口開いて異口同音に高笑ひ、此の聲聞いて竹齋は
立ち止まり、竹ハ、ア解つた、此奴又悪戯小僧の宗純の仕業に
違ひない、乃公が出て来る度毎に、番を打つて徹夜をするから
夫れで小僧共奴が眠られんので、夫れで今夜斯う云ふ悪戯を仕
やアがつたに違ひない、そんなら別に這入つても差支へはある
まい」と、再び取つて返して、大手を振つてドン、と門内へ
這入つて来た、之れを眺めた大勢のお弟子達は、バラ、ツと
其の處へ飛び出し、竹齋の前後を取り捲き、秀「ア竹齋御老人
門柱に貼紙がしてあつたのが目に付かんか、竹「オ、目に付いた
秀「あの貼紙を見ながら、なせ這入つて来た、ア皮の類所持
の者は、一切門内に立ち入る事は相成らんのぢや、歸れ」と、
と、聲高らかに呼ばはる折しも、大徳寺の御太鼓堂に當つて、
ドン、ドン、と打つと、竹ハ、オ、小僧共、當山内に皮の類所
屋竹齋はニッコと打ち笑ひ、竹「ア、小僧共、當山内に皮の類所

待間程なく御杉戸が左右に開くと、正面一段高さ處には、足利三代の前將軍義滿公、一段下つた所には仁木右京大夫義長、其れより續いて島山、山名、吉良、石堂、千葉、桃井、一色等足利恩願の大名、何れも烏帽子大紋にて七八十人程、素袍の袖をかへして、威儀堂々と居並んで居られます、其の儀式と云ふものは、誠に以つて素晴らしいもので、義更は遙かに此方に兩手を支へ、御挨拶申しあげ、此の時義滿公は中啓を手に握らせられ、最と麗はしき御機嫌の躰にて、義大徳寺の養更、退儀……従がひ、即ち是れに召し連れ出でましたでございませう、養更の徒弟宗純とは其の方か、苦しいない近かう参れ」とお言葉が下る、すると宗純は「宗長まりました」と怯めず應せす、ゾカッとする前に進み、宗「今日は」と只だ一ト言云つたざり、膝の上へ手を置いたばかり、泰然自若として控へて居るを、前、

軍義滿公は、ツク、宗純の顔を御覽なさるに、只だニコ、と笑を含んで居る様は、誠に愛嬌溢るばかり、イデ此の上は何にか一つ智慧を試して遣らうと云ふお積りで、暫時考へて居らせられたが、義「コレ宗純、彼れを見よ」と仰せられた、宗「ハッ」と振り返つて見ると、御座の間の右の方に二間四方もあるうと思はれる大衝立がございます、それに墨繪で猛虎が一匹書いてあり、此の頃時々衝立を抜け出して、何れへか参り二三日も歸らぬことがある、夜なくと云ふ程でもないが、昔しからはれに似寄つた話もあり、不審には存じて居るが實際の事や、就ては宗純アノ虎を抜け出たさぬやうに縛つて呉れまいか、何うなさるかと思つてござつた列座の面々は、皆片唾を呑んで控へて居る、宗純は平氣な顔して、宗「ハイ畏まつてございませう、盃茶、唯今虎を縛りますから何卒お繩を一つ拜借いたしたい、

威勢を以つて、後ろへ廻り虎を追ひ出して下さい。仁ッそんな
 事が出来ぬものか……」追がの仁木右京太夫も、何うする事も
 出来ず、將軍家の顔と宗純の顔を、變る／＼見較べて困つて
 居ります。此の時宗純は將軍に向ひ、宗恐れながら將軍にお聽
 きでございませうか、武家の筆頭仁木殿でさへ、ナカ／＼追ひ
 出すことは出来ぬと仰せられます、出さへすれば私しは構りま
 すのは容易うございませうが……」義最うよい／＼宗左様で
 さいますか」と繩を捨て、ナンと座つた、仁木殿は苦々しい顔
 をして「仁小僧奴、乃公を花車に使やアがつた」と呆れ反つて
 ある、是れ所謂時の執權として仁木殿が餘り威張つて居られた
 ので、幼年の宗純いつか心にお憎しみあつたと見えて、當意即
 妙の洒落をなさつたのでございませう、尚ほ義満公より二つ三つ
 の御問ひがありましたが、何れも宗純即座の御答へ、鬼角する内
 にはや午刻過ぎに成つたので、是に於いて兩名の者へ御飯を給

盛察は一筋の繩を持つて来て宗純に渡しますと、それを左
 の手に握つて、左右の袖を邪魔にならぬ様に後ろでシツカと括
 つて貰ひ、甲斐／＼と参りまじした、宗ヤイ虎、將軍の命によつて今汝
 を縛るぞ、併し衝立の中に這入つて居ては縛り悪いから此處へ
 出、ヤイ虎、サア出ぬか、剛情な奴ッ」と此方を振り向き
 借いたした、仁木右京太夫義長、音に聞へた大名の中でも頭領
 と云はれる位の仁木右京太夫義長、此の列座の大名の中でも頭領
 ます、此の仁木の御家は後徳川時代になつて、四天王の隨一、
 何事であるか、義長殿其れへ参つて、仁宗純どの、何に事ぢや
 中、宗ヤイ今將軍の御命で此の虎を縛るところですが、衝立の
 中に這入つて居て、ナカ／＼に縛り惜い、何うか武家頭領の御

賜はりますたから食べました。義一、ア左様でござりますか、然らば
 眞實は汝を試したのちや。宗「ハ、ア左様でござりますか、然らば
 を通りましたので、義「ナニッ魚肉が汝の腹内を通つた。宗「御意
 にござります、私しの口は鎌倉街道の關門、肛門は搦手、腹の
 中の食道は天下の往來、鎌倉街道でござりますから魚商も通る
 米商も通る、餅商も通る、菓子商も通る、八百屋も通ります」
 と恰も水の流るゝ様に聊かの淀みもなく答へられました、なれ
 ども此方も三代將軍義満公、九歳や十歳の子供に言ひ負されて
 ばかりも居ない。義「フム……然らば汝の腹は天下の往來ぢやな
 宗「御意にござります。義「往來ならは農工商ばかりでもあるま
 い、武士も定めて通るぢやらうナ。宗「左様通ります。義「然ら
 ば武士を通して見よ」と言ふが早い、後ろの方に御小姓が服
 紗を以つて握つて居りました、御太刀を取る手も早やく、や

はりました、また列席の大名へもズツとお腹が並ぶ、養叟と
 ヨイと見ると膳部は皆魚類でござりますから驚いて、全く頂か
 のと云ふ事も出来ませんから、頂いた積りで箸を取り上げ、直
 ちに箸を元の處へ置いて膝の上、手を載せた。宗「純は少しも頓
 着しない、ムシヤ、食ひ始めた、養叟は眼顔で知らせたり、
 袖を引つ張つたりいたします、が、宗「純は一向平氣にて、宗「御
 師匠様決して御心配下さるな、將軍から下すつた魚肉、誠に結
 構「前將軍義満公の御飯も済み、少時御休息のあつた後、義「宗
 が、前將軍義満公の御飯も済み、少時御休息のあつた後、義「宗
 純「此處へ参れ」と仰つた。宗「ハ、イ長まりました」と、スタ
 ンツと、御壇の下まで参り、宗「何に事でござります、義「汝は
 今魚肉を食したな、師の養叟ですらも食さぬものを、何故五戒
 を破つて魚肉を食ふた」と少しく將軍の御聲暴らかに相成りま
 したが、宗「純は平氣なもので、宗「左様でござります、將軍から

ラリツと引き抜き、義「ア宗純、天下の往來ならば、予が面前にて此の佩刀を通して見よッ」と宗純の眼の前にバツと太刀を突き付けられた、此の時養叟禪師は大いに驚ろき、養「ソレ見よ言はぬことではない、餘り辨に委せて無禮を申し上げたから、到頭御手討になることか、不憚の者よ生命乞ひをして見ようか知ら」などと蒼青になり眼を閉ぢてお出でなさる、並んで居りましたる大名衆も互ひに顔を見合はして、皆「急々將軍が御手討ち遊ばすか、餘り伶俐過ぎる故に、嫩にして断たざれば斧を用ゆる憂ひあり、小火消さざれば炎々を如何と云ふ思召であらうハテ是非もない」と思つて居ると宗純は少しも驚きたる容子もなく、態と咳拂ひをいたし、宗「エヘン、私しの腹の中は鎌倉街道、天下の街道には相違ござりませんが、此の口が大切なる關門關所でござる、天下太平萬民安堵の折柄に、南朝の殘黨時として潜伏ぬとも計り難い、殊によらば此の佩刀は反逆を企つ

浮浪人であるかも知れぬ、身分を調べた上でなければ街道を通すことはならぬッ」と云ひさま將軍の持つて居らつしやつた御佩刀に手を懸け、宗「怪しき奴なり、關門へ留め置くぞ」と言ひ乍ら、バツと持つつる御佩刀を此方へ奪つた、流石の將軍もアッとはかりに御威心なされて、義「オ、宗純、面白き返答、其の太刀は其の方へ永く預け置く」と仰つた、此處には餘程深い意味があるのでございます、若しや南朝の爲めに推されて反逆の旗でも翻へす様な將軍の邪推が無いとも云へぬから、一旦佛門に入れば左様な事には應せぬと云ふ意味を聞かせたものでございます、後々まで一休禪師の御側には朱太刀が置いてあります、したと云ふ、すべて僧侶には戒刀と云ふものはあります、現に太刀を座右に置いたのは、此の一休様に限りませんが、全く足利義満公より永く預けると言はれたのは、畢竟拜領の品でござい、ます、奉公人でも一寸二三日の御暇なら又歸つて來ますが、

一 休 和 尚

後なご云ふものは人氣が荒々しく、兎角喧嘩口論果ては刃傷
 などの行はれるものでございませうから、足利一代二代は全然で
 戦争ばかりで、三代將軍義満公の時に當つては、少々平和太平
 とは相なりましたものよ、未だ人氣は荒々しい、其處で此の人
 氣を和らげるのには茶の湯が一番でございませう、一つには諸大名の荒々し
 は殊の外茶の湯を好ませられまして、天下を治めんとする者の心の内は
 い舉動を矯め様どの思召し、天下を治めんとする者の心の内は
 又格別でございませう、然れば豊臣關白秀吉公でも徳川内府家康
 公でも皆茶事を以つて御道樂といたされました、實に此の道樂
 と云ふのが大變に奥の深い政略と申すこととございませう、さて
 いよ大徳寺に御沙汰があつて、來る廿五日前將軍義満公成
 らせられ、茶の湯を催すによつて左様心得る様にどの事、其の
 折に三國傳來蛇空の茶碗を以つて茶を點て呉れいとの上意が下
 りました、養叟禪師は豫て將軍家よりお預りの茶碗を大切に御

一 休 和 尚

永のお暇と云へば歸つて來ません、この永いと云ふ字は中々に
 六ヶ敷いのでございませう、餘事は借て置き、師の坊養純始め一
 座の大名衆、一時は手に汗を握つたが、此の答へを聞いて驚い
 て仕舞ひました、實に上乘の首尾で御太刀まで拜領し、尙ほ將
 軍に於いては御機嫌いよ、麗はしく「義宗純が玄妙玄微の即
 答には感心いたしました、近日大徳寺へ参り茶事を催すであらう、
 よつて其の方へ此の茶碗を預け置くから、之れによつて茶を點
 て馳走をして呉れる様、養ハッ承知仕りました」と、其處で將
 軍家はお座を御立ちになる、宗純も師の坊養叟禪師に連れられ
 て、お下りに相成り、大徳寺に歸つてから、今日のお答へは天
 晴々とお養叟禪師から、大層褒められた事でございませうが、併
 し此の湯と云ふものは人の心を鎮めますもので、如何に氣
 質の荒き人でも茶の道に入りましますと、謙退辭讓の徳に化せ
 ちれ、沈着して風流韻事を樂しむ様に相なります、別して戦争の

預りして當日の來るを相待つて居ります、所がいよ、二十五
 日と相成り、午刻少々前に前將軍義満公、紫野大徳寺に來、
 なる、一番手が仁木右京大夫義長、續いて足利恩願の大名十二
 頭、其の他旗下の面々、前後の守護いと嚴重にして、行列美々
 しく乗り込まれました、暫時別席にて御休息の上、御茶室へと
 御案内申し上げる次第、此方お弟子の波凌、木通、秀庵、鐵梅、
 が集まつて、波「御師匠様が將軍様から御預りの蛇壺の茶碗と云
 ふものが、一通見たいものだな、お前等見たいかい、木「イ、ヤ
 まだ見ない、内密で拜見がしたいね、アレは三國傳來の尋い御
 茶碗だそうだから、秀「左様、今の中に拜見しない、將軍様
 が御持歸りになれば、逆ても此後拜見の出來る品でない、何う
 だ皆んなで今の中に拜見し様ぢやアないか、と何にが十歳前後
 のいたづら小坊主計りの事にて、床の間から例の御茶碗函を取
 り出して来て、紐を解き開いて見ると、綺麗な御服紗に包んで

ございます大きな御茶碗、秀「蛇壺ッて、壺も何にもありアしな
 い、此様な樂焼だ、皆「ドレ、早やくお見せ、御師匠様が來な
 い内に、と心が急きますからツイ引つ張り合ふ、途端に遇つて
 取り落しますと、ボカリ二つに壊れて仕舞つた、吃驚いたした
 小僧共は乃公は知らんお前だ、互ひに争つて見たが仕方がな
 い、果は顔を見合はせてメソ、と泣き出した、所へ本堂の方
 より歩つて参りましたるは彼の宗純でございます、宗「何うした
 秀「庵、宗「純さんか、實にゑらい事をしたんで、宗「何にを
 るらい事をしたんだ、木「實は斯う、云々で、大切なる蛇壺の
 御茶碗を裂つて仕舞つた、宗「ソレは面白い、波「何に面白い事
 があるものか、秀「宗「純さん何うか仕様が有るまいか、お前は
 師匠様の愛弟だから、お前から詫言つて呉れまいか、宗「ヨシッ、
 お前達決して心配しなさんな、罪は私しが被て上げよう、皆「其
 れでも萬一御手討にでもなると大變だよ、宗「御手討結構……此

の間御師匠さんに私しが叱かられた時に、皆さんが詫をして呉れたから、今日は私しが罪を被て上げる」と他の小僧達を慰撫して、例の茶碗を取るより、尚ほもボリく片ッ端から細く割つて仕舞つた、之れを眺めた小僧の連中、皆々は心配そうに皆々コレコレ其様なことをしては却つて叱かられる。宗「イヤイヤ心配するには及ばぬ、到頭細かく裂つて仕舞ひまして、其れを服紗に包み懐中に及び、素知らぬ顔容をして居ります、所へ養叟禪師は豈夫斯かる大變があつたとは御存知ない、御茶碗を持つて茶席へ往かんとして床の間の方へお進みなさる、すると宗純突然其處へ飛び出して、宗「作麼生」と例の問答を仕掛けました。不意の問答に養叟禪師も驚いたが、自若として慌てないのが禪味の尋い所、今急がしいから答へないなご云ふ譯にも参りませんから、養「説破」と仰在る、宗「森羅萬象、其の他生ある者、何養「時來つて滅す」と斯う仰在つたから、宗純はニコニコ

ひながら、宗「形ある茶碗、此に滅す」と云ひつゝ懐中に隠して置いたる、例の茶碗の破片を其處へ差し出した、之れを眺めた養叟禪師驚いたの驚かないのちやアない、アツと云つたばかり。碗ではないか、宗「ハイ生ある者は滅し、形あるものは毀損の憂ひあり、花も咲く時もあれば散る時もあり、養叟禪師も餘りのことに唯茫然として居られました、さて何うも破砕したものは仕方がない、いつまで斯くてもあるべきことではございませぬから、弟子の華叟をお呼びになり、養「コリヤ華叟、華「はい何にか御用でございますか、養「大變な事が出来た、實は斯様云々で、華「ヤッ其れは大變な事が出来た、實は斯様云々で、何んでも拙僧の留守に、此の茶碗を出して見て居る中に、華「過失で壊したものと見ゆる、だが華叟諷責は言へない、華「如何なる譯でございませぬ、養「私しが往くと突如に問答を始め、生

あるものはと問ふから、必ず滅すと答へた、スルと又形體あるものはと問ふから必ず滅すと答へた、懐中から此の塊れた茶碗を出して形體あるもの、茲に滅すと云ひよる、百も承知二百も合點で出した問答だから、今更ら誦責は言へない、併し此の儘には棄て置かれぬから、將軍へ上申いたして、御詫びを申し上げるより他事はあるまい』と其處で養叟は華叟を打連れ、仁木右京大夫様まで、右の次第を恐るゝ言上に及ぶ、サア、是れからいよ、此の宗純を、手討にまでする立腹遊ばされたる、三代將軍義満公の面前に於いて、如何なる事を陳述に及びまするか、そは次席に……。

第六席

偕て、仁木右京大夫義長は、養叟華叟の兩和尚から將軍家よりお預けになつたる大切なる蛇杵の茶碗を、斯様々々で毀損

ましたと云ふ事を訴へられましたが、義長も大いに驚いて早速此の旨義満公へ申し上げる、寛仁大度、英達なる義満公も、日本に二つとない貴重なる御品、殊に御自慢御秘藏の茶碗を壊したと云ふのだから、烈火の如くに怒り玉ひ、養叟最早や勸辨罷りならぬ、手討にいたすから此處に連れ参れッ』と、云ふ烈しき嚴命、此處に一寸申し上げまするが、苟くも皇子ともあるべきお方を、將軍なりとて手討にいたすの、名前を呼び捨てにいたすなごうは、チト有るまじきことの様に御考へ遊ばすお方もございませうが、只今は養叟禪師の御弟子の宗純、修業中は普通通の徒弟と同じ様に取柄へと云ふ御内勅でございませうから、義満公からも斯る御言葉が下がつたものと見えます、其處で最う仕方がございませぬから養叟禪師も一間へ宗純を招き、養叟と云ふ將軍の仰せだ、養叟前大變な事を出來したな、御手討にする

一 休 和 尚

必らず死にます、結構でございませうと平氣なものだ、養叟禪師も呆れて仕舞われる、應て養叟禪師は華叟と共に宗純を連れ、御前へ出ますと、義満公は待ち兼ねたといふ御様子にて、義宗純其の方は予が秘蔵の茶碗を破つたな、宗ハッ過失で壞りましたとございませう、義イヤ、過失とは申されぬ、こは子供などの弄ぶ品にはあらず、其の上粉微塵になすとは、承知の上で破壊いたせしならん、最早や勘辨は相成らぬ、此座へ直れッと言ひさま、御太刀に手をかけて、ジツと宗純の御様子を見、なるど、真劍頭上に落むと雖も、ビクとも動かざる事、泰山の如し、アハヤ義満公抜き放さんとする時に、宗純は義満公の刀を、持つたる手にビタリ手を掛けまして、宗高砂の尾の上の鐘も破れるなり、土で担ねたる茶碗大事かと、仰在つた、是れ本歌にあらず、狂歌にあらず、所謂禪家の道歌と申すものでございまして、一種異彩の御歌、宗純尚ほも義満將軍に向はれまして、

一 休 和 尚

宗生ある者は死し、形体ある物は必ず滅す、今は天下泰平にして萬民安堵の思ひを爲すと雖も、萬一國亂れて戦争となつた曉には如何なる、茶の湯を以つて敵勢を禦ぐの思召しか、イヤサ、茶碗を以つて號令が出来まするか、治に居て亂を忘れずとやら、此末は茶の湯などはお廢めなされて、文武政治に御心を御用ひなされまし、承知で壞した此の宗純の首、茶碗と取り代へに、斬るならお斬り遊ばせと、首差し延べて泰然自若酒々ど大音に述べ立てたる覺悟の体、實に子供とは思はれませぬ、此の時義満公後へ下つて手を掛けて居た御太刀をガラリと投げすて、義ウム宗純、能くも義満に諫言を申した、嗚呼、予は過てり過ちぬと、仰せられ、養叟華叟の兩和尚もホツト呼吸を吐かれました、是れは臨濟宗に於いて自慢の御話してございませぬ、其處で宗純も大いに面目を施し、此の事が大いに評判と相なりまして、宗純の名を知らない者はない様になりまし

人もありまされども、そう一概にないとも云ははません、宇
 宙の森羅万象、能く窮理して見ると皆化けるものだそう
 早やい話しが、草木が朽ちて化石となり、水が腐れて蛆が生く
 是れは清水が化けるのです、雀海中に入つて始となり、山の芋
 が鱧となる、世の中が開化すると云ふのも、皆化けるのです、
 人間は化けない變りに、年を老ると云ふのも、イヤ是れは滑稽
 で恐れ入ります、駄言擲筆、其處で此の古狸に打ち負かされま
 したる、東福寺の長老玉英師は種々御考へなされて、此の事を
 眞珠庵の養叟明晩は宗純を連れて来て下さい、養ヨシ、合
 いますから、養叟明晩は宗純を連れて来て下さい、養ヨシ、合
 駄だ、養叟明晩は宗純の一体小僧をお連れなすつて、明
 日の夕刻、東福寺へとお出かけなさいました、是れは今夜古狸
 と宗純と一問答させやうと云ふ考へで、宗純は恐れ多くも、や
 ん事なき御身柄であらつしやるに因つて、彼の魔性も恐れて此

た、最も前席にも申しあげましたる通り、剃髮の際「有漏路よ
 り無漏路に歸る一休み、風吹かば吹け雨降らば降れ、柳はみど
 り花は紅い」と云ふ一首の歌をお詠みなされてから、一休和尙
 一休上人と人々が言ひまする、又御自分でも一休と御名乗りな
 さる機になりました、話し變つて、其の頃名高き東福寺の寺中
 に一つの古寺がございます、此れは最上住職もなき餘程大破し
 て居る、所が此の廢寺に狸が棲んで居りまして、毎夜大坊
 主になつて本堂の真ん中へ現はれ、其れのみならず、人さへ見
 れば禪家の問答を仕かける其處で是れも禪宗悟道の一つで、東
 福寺の玉英長老始め其他の名僧たちが、此の狸と問答をしたが
 皆んな此の老狸の爲めに負けて仕舞うと云ふ次第、併し現今の
 様な文明開化の世の中に、狐や狸が人間を誑す化かすなど云
 ふのは妄誕極まるお話しで、萬物の靈長たる人間が畜生に誑さ
 れるなんてなことは有るべからざることだなど、言はれる御

の處を立ち去るであらうと云ふので養叟と玉英長老と御相談の上、今東福寺へ宗純小僧さんをお連れに相成つて來られたのでございませう、そこで養叟が「宗純、さて今晚お前はあの古狸と問答をするのぢやが、能いか」「宗ハ、宜しうございませう、養然し、ナカク、古狸もゑらい、人間も及ばぬ位ひ物事を能く知つて居るから容易では無いぞよ」「宗委細承知いたしました」「と、何にを言つても平氣なもの、そのうちに夜の亥時少々前に相なつて來る、すると養叟は「養サア能いか、能くば參らう」と、養叟禪師は宗純をお伴れにてお出でになりました、東福寺長老玉英殿には、燈臺に一本の燈心、之れを點しまして手に携さへ先きに立つてお往でなさる、だんく三人にて例のお寺へ來て見れば、もう古寺でございませうから、門なども大破に及んで居る、長老は先きに立つて門を開け内へお遣入りなさると、兩側には桐の木が茂生つて居りまして、晝尚ほ薄暗く、深閑と

して物凄く所でございます、本堂の縁側までお往でになりました、た時に玉英長老が「玉サア宗純よいか、此の燈臺を持つて御本堂の真中に座つて居るのだよ、必らず睡つては可かぬぞよ」と、宜いか「宗長、ございませう、此の如意を持つて居よ」と、養叟禪師は鐵の如意を宗純に渡しました「宗有難うございませう、養其れでは最う恐僧達は歸るぞよ、必らず睡るな」と、諄くも仰せられ、其の儘兩僧は此處をばお立ち去りとなる、扱て宗純は例の如意を腰に帶し、燈臺を左りの手に持つて、ソロソロ本堂へお遣入りになりました、何しろ斯る古寺でございませうから陰々として物凄く所でございます、本堂の縁側までお往でになりました、居る、座禪と申しますと一寸云へば安座を組むようなものです、此方養叟禪師と東福寺長老玉英師とは、最早恐僧等は歸るぞと云つたのは嘘で、宗純に知れない様に密と本堂の裏手へ廻り、

椽側へ上つて障子の破れ目から様子を窺つてお居でなさるのでございませうが、是は兩僧が此處に居ると申しては宗純の氣が甚むと云ふならぬから、立歸つたる体に見せて置いて、此處に忍び、何う云問答をいたすであらうと覗ふ傍ら、若し又古狸奴が惡戯でもするやうな事があつたら、其時こそは飛出して助太刀をして狸を懲して遣らうと云ふお積りでございませう、其處で此方の宗純、其様な事は少しも知りませぬ、座禪を組でシツと眠さを堪へながら、最う老狸奴出て來る時分であらうと待つ居る、其の中、彼れ是れ丑刻時分、只今の午前二時三時、即ち昔しの丑刻と申して、家の棟も三寸下り、水の流れも止まり、草木も眠ると云ふ刻限、眞逆に左様なこともございませう、四邊は陰々として燈明の油もだん／＼少なくなり、將に燈火も消えなるとする有様、パーッと明るくなつたかと思ふと暗くなり、暗くなつたかと思ふと卒然と明るくなる、すると今まで何も無つた

管の御本尊様の前に、四斗椽の様な大入道が忽然と現はれまして、普通の子供なら驚いて氣絶でもいたしましたせうが、一休の宗純さんは、ソレ出たなと云ふ様な顔をしてニコ／＼と笑つて見上げて居る、此方では養叟和尚と玉英禪師が、一生懸命眼を圓くして覗いて居る、其の大入道が餘り大きいものですから宗純が豆粒のやうに見えます、最も大きいもの側へ行くと、何んでも小さく見えます、奈良の大佛様の側に棄兒があると云ふので見に行くと、ナアに然うぢやアありません、旅の坊さんが行倒れをして居たと云ふ事で……、餘事は借て置き、此の時宗純は突如、大入道に向つて「宗作麼生」と仰つた、すると大入道は「大説破」と答へた、もると宗純は「宗釋迦一代の經文甚麼」入道答へて「大八萬法藏十二部經」と云ふ、此方では兩僧耳を澄して之れを聞き、兩ハ、ア、狸もゑらい事を知つて居るわい」と、驚いて居る宗純は尙も殺げさまに問ひかけま

した 宗「汝答へたな併し人は軽く法は重し、法に過ぐるものは
 なし、其の八萬法藏十二部經の中に、法といふ字の數幾何」此
 の問に例の大入道も答へが出来ないと見へてウムと語塞つて仕
 舞ひました 宗「甚麼に〜」と、問ひ詰めたが急に答辭が出来な
 い、其處で宗純が 宗「汝、八萬法藏十二部經と答へながら、其
 の中に在る法の字の數を知らぬとは、いよ〜 魔性に極まつた
 り」と、言ひさま、ズイツと立ち上るなり、例の如意を以つて
 突然大入道の腰のあたりを、ポーンとお打ちなすつた、すると
 大入道も敵はぬと思つたか、パラ〜ツと逃げ出だす、最う逃
 げ出す後ろ姿を見ると、狸の本体を現はして居る、宗純はすか
 さず飛鳥の如く躍りかよつて、ボカリ〜ツとお打ちなさる、
 狸は逃げ路を失なつたと見えて隅の所に小さく蹲まる、宗純は
 力に任せて如意を以て叩のめされた、始終の様子伺つて居た玉英

長老と養叟禪師は其處へ飛び出しまして 兩宗純威心ちや、を
 らい〜」此の聲には宗純も驚いた 宗「オヤツさては古狸奴、
 今度は師匠と長老に化けたな、己れ覺悟ン」と鐵の如意を振り
 上げて、既に打たうとする有様 養「イヤ〜 宗純、狸ではない
 養叟ちや、眞の玉英長老ちや 宗「己れ子供と侮つて師匠様や長
 老様に化けたとて、此の一体の眼は黒いぞ 玉「ヨリヤ〜 宗純
 過剰歸ると云ふたのは、お前の氣を緩めぬ様、殘らず障子の影
 で聞いて居たのちや 宗「何んと言ふとも此の宗純は誑されぬ」
 と剛情を張つて居る中に、がや〜と東福寺の坊さん達が、手
 に手に灯燈を點て此の方々をお迎へに來ました 玉「皆の衆大儀
 ぢやつた、到頭宗純どのが老狸を退治なされた、シレ押へる
 一同「畏まりました」と一同が本堂へ上つて見ると驚れて居りま
 したのが、餘程の年數を経た銀毛の大狸でございませう、此に宗
 純も漸く兩僧の狸でなかつたのが分りました、果ては大笑ひと

なりました、間もなく夜も明け放れ、狸の死骸は東福寺の裏の畑へ埋葬しまして、一本の塚を建て、遺つたので、之れを東福寺の狸塚と云ふので今に残つて居ります、さて翌朝と相なり養叟の狸師と玉英長老とが宗純をお呼び寄せになりまして、養叟昨夜の問答は實に感心した、それにしても居る事を、實は法と云ふ字は幾つあるか知らぬ、お前は居る事を聞へた、全体法の字は幾つあるのぢや、宗「イヤ其れは私しも存じません、養叟ニッ知らぬで問ふたのか、宗「其處でございませぬ、總て狐や狸は人間の氣を引くことが早やいから自分で知つて居る事で問答をすると、彼れに先を取られて負けになります、我が腹で問ふたことは我が腹で悟つて答へますから、自分で自分に負ける様なもの、私しは自分で知らぬことも問ひましたから、狸は推量の仕様がなから負けたのでございませぬ、聞いて兩僧手を打つ

て感心なされ、此の事が大層の評判に相なりました、ナナ是れからます、晝夜の間の勤學御修行になつて、頓才奇辯を發しますると云ふお話しは、次席に引き續き申し上げます……。

第七席

光陰は矢の如く、月日に關守りなく、昨日と暮れ今日と過ぎて宗純も早や十三才と相成りました、其の年の春三月中旬、嵐山の櫻花は爛熳と咲き揃ふ頃、師の養叟禪師は六人の弟子を御側近く招き、養叟「ア今日は其の方等へ暇を取らせませぬ、終日嵐山へも行つて遊んで参らつしやれ、他宗は知らず、禪家に於いて修行中の徒弟共を觀花などに遣りますことは決して無い事でございませぬが、養叟禪師は何にか考ふる事があると思は

て、斯くは申されたのでございませぬ、喜んで弟子達、宛然籠の鳥を放ちたる如く、各自臺所に於いて握り飯を拵らへ、或ひは

休 和 尙

煮を調へ、夫れく支度の上、師匠に禮を述べ、宗純諸共に
 彼の嵐山へ出掛けて参りました、前岸には例の大堰川、後に渡
 月橋と云ふ橋が架りましたが、尙は其の當時は渡しで有つたの
 で、此の渡し場まで参りましたが、對岸へ越さうといたします、
 宗純は一同に向ひまして、宗ア、一寸待て、對岸へ渡るよりは
 此方で見た方が可からう、遠いは花の香と云ふ譬へがある、秀
 其れア觀花は此方からでもいゝか、お前は今年十三歳になつた
 のだから、十三参詣りをしなければなるまい、宗ア、ム十三参
 詣りとは其れア何んだ、秀オヤ、お前は僧侶であつて十三参
 詣り、觀音、勢至、阿彌、阿耨、大日、虚空藏、と此の御佛が一
 年中の御世話を下さるんだ、其の十三番目の虚空藏菩薩、之れ
 に参詣をすれば智慧を貰うと云つて、誰れでも十三歳になると
 御参詣をするのぢや、宗ア、ム……秀庵、お前虚空藏と文珠と何

休 和 尙

らがるらと思ふ、秀夫りア、文珠様は智慧の御佛だ、文珠様
 の方が餘ッ程ゑらい、宗ア、すると文珠は上馬で虚空藏は下馬か、
 秀佛に下馬上馬つて事があるものか、併し文珠様の方が、ま
 あゑらいたらうかい、宗然うすると、三人寄れば文珠の智慧と
 云ふから、文珠の智慧は三人前で、虚空藏のは先づ一人半……
 秀オイ、乃公ア虚空藏菩薩の方へ参詣して、半人前の智慧位増
 して貰はないでもよい、秀エ、其れなら勝手に仕なさい、人の
 親切を無にするに云ふものだ……と、秀庵は眞面目になつて
 怒つて居るを、傍から皆んなが宥めまして、木ア、そんな事
 で喧嘩をするよりも、此處で辨當を開かうぢやないか……オイ
 老婆さん、蓮を一枚貸してお呉れ、と、傍への茶店より蓮を借
 之れを河原へ敷いて座を占めました、當今は然うでもございま
 せんが、古昔しはこの觀花が非常に盛んなものでございまして

一 休 和 尙

この観花にも幾通りもございませぬ、菟籠などに乗つて来て、
 煮店へ登るお客もあれば、辨當を擔いで来る人もあり、中には
 食はず飲まずに花を觀て、空腹を抱へて歸つて參りまする者も
 あります、浮世と申しますものも様々でございませぬ、宗純等
 一行の者も未だ修業中の身の上、何事も介意ませぬ、慈の上に
 座り、彼の自ら握つた辨當を取り出し、無恰好に、長い奴もあ
 り、短いのも三角のも六角八角と種々な恰好の握り飯を、皆々
 一生懸命に食べて居ります、處へ年輩六十有餘、頭髪は撫で付
 けにして被布の様なものを着し、いと上品なる一人の翁、提籃
 を携へ、片傍に蓮を敷かせて、焔爐に火種を貰ひ、湯沸を掛け
 結構なお辨當を開いて、瓢の酒を燗をして、グビリ／＼と徐々
 飲み始めました、今しも此方に居ります宗純等の一ト群を
 見まして、翁ハ、ア……皆んな禪家の僧侶達と見ゆるな、秀ハ
 イ……左様でございます、翁如何ぢや、御酒を進上りませうか

一 休 和 尙

秀「イヤ有難うございませぬ、禁酒山門に入るを許さず、不飲
 酒戒で、御酒は飲まれませんのでございませぬ、翁左様か、では
 お肴は如何ぢや、秀「不殺生戒で、魚類或ひは肉類は一切食する
 事は出来ません、翁ハ、其れは難儀なものぢやなア、人の悦
 ぶ酒肴が、飲まれぬ食はれぬと云ふのは、夫れだけの不自由を
 して僧に成られて、何んぞ結構な事でもありますかな……、秀
 ハ、一人出家をすれば、九族天に生ずと云ふ事があります、
 翁「フ、ム……一人出家をすれば、九族天に生ずと云ふことは
 夫れは私しも聞いては居るが、いよ／＼其れに相違ないか、秀「
 其れに相違はございませぬ、翁其れではお尋ね申すが、釋尊は
 多くの御弟子もあつた、彼の五百羅漢の中に十六羅漢、又其の
 中に二羅漢と云ふて、これは多くの中から撰び出した好いお弟
 子であらうが、其の一人の目蓮尊者の母親は何故餓鬼道へ墮落
 しました、水を飲ませようとすれば、火になつて燃ゆる、そこで

之れを救ける爲めに、三十三天士卒の内蔭に在る、甘露水を取
つて飲ませようとした、然れども火に化つて燃へる、是に於い
て、龍頭仙の頂上に釋尊說法を成されてござつた所へ、目蓮が
母の苦惱を救ひ玉はれと願ひ出でた、此の時釋尊の仰在るには
其の苦を救はんとならば施餓鬼と云ふものをせよ、有縁無縁十
方法界の三界萬靈、所在る自他平等悉く世上に在る餓鬼を助け
る事をせよと仰在つた、其處で例の施餓鬼と云ふものを始めた
今、孟蘭盆會と云ふものは、目蓮尊者が母の爲めに行うた事だ
あると、私しは聞いて居るが、一人が出家をしたばかりで、九
族天に生ずるものならば、目蓮尊者の母親は餓鬼道へは墮落ま
いがな、サア、此の返答は如何ぢや 秀「へエ…… 翁「へエ……
では分らん 秀「ブーン 翁「ブーンと云ふことがあるか、サア、
グツとでも言へるなら言つて見よ」と、云はれて秀庵は困つて
仕舞ひ、ウンともスツとも返答が出来ません、所が其の傍に居

りましたる所の宗純 宗「エ、一人出家をしても、九族天に生じ
ませんな 翁「何んの其れが生ずるものか 宗「私しも然う思ふて
居ります、御酒頂戴いたします 翁「ウム、飲むかへ 宗「へエ、
有難うございます、飲みます」と、盃で受けてグツと飲み干し
宗「このお肴頂戴いたします 翁「サア、唄べさつしやれ 宗「
へエ、是れは玉子の厚焼、誠に結構……ウム、蝋の關東煮、これ
は共喰ひだが頂戴いたします、ア、美味、有難うございま
す 翁「コレ、待つしやい、オヤ亂暴にも皆んな唄つて仕舞つ
た、彼の子は答へも出来ない代りに、師の坊の戒言を守つて食
せず、慎んで居る所は、誠に感心ぢや、お前は亂暴だ、勝手に食
食事をするものがあるか」と、云はれ、此の時宗純は翁に向ひ
宗「砂中に玉あり、他の禁戒老釋迦に任す」と、此の言を聞く
なり、彼の翁は驚いて、何處ともなく逃げ出して仕舞ひました
秀庵等も呆れて最う歸らうと云ふ、茲で皆々支度をいたした

一 休 和 尚

所を後になし、彼の渡し場まで参りますと、大勢の人が群集して居ります、何に事やらんと見ますと、二三名の者が釣を垂れて居ります、其の中の一人が、今しも釣り上げた魚が、水際まで来て上らうと云ふ時、スボンと放れて落ちて仕舞ひました、此の体を見るより、宗純は手を拍つて、宗三禪師の心を得る、善哉々々、と、躍り出した、此の時、片側に佇立で居りました、観山の僧、ツカ、ツカ、と宗純の所へ参つて、脊後より脊中を叩いて、僧「コレ、コレ、彼れは三禪師の心を得たのではあるまい、何に懸つたのであろうかな」と、云はれて宗純は後ろを振り向いて、宗「アカスカベカツコ、サア皆んなお出で〜」と、其の儘で逸目散に逃げ歸つて参りました、秀「へエ、御師匠様只今……」
 養「コレ、コレ、大きな聲を發して何に事ぢや、秀「イエ、……平素申し上げる様ではございますが、些と宗純をお叱りなさらぬと不可ません、養「如何いたしましたのぢや、秀「實は今日御取

一 休 和 尚

を頂戴いたしまして嵐山へ参りました、すると宗純が……」と是れより今日の有り次第を、逐一師の坊に物語りをいたしました、秀庵の物語りをシツと聞いてお出でになつた養「御師匠様なせでございませう、人にベカツコをしたり、酒を飲んだり、肴を喫べたり、其様な事が宜いのでございませうか、養「ハ、ア……其れはお前達には分らぬと見わが、平素恩僧がお前達にも話しをするが如く、彼の唐土には我が邦より、ズツと早やくから佛法が開けて居る、彼の毘盧宗、成實宗、戒律宗、三論宗、涅槃宗、地論宗、淨土宗、禪宗、攝論宗、天台宗、華嚴宗、法相宗、真言宗の十三宗、所が日本へは天竺から直ちに渡來のものではない、唐土からして渡來つた佛法だ、即ち法相宗、三論宗、華嚴宗、天台宗、俱舍宗、成實宗、律宗、真言宗、禪宗、淨土宗、此の十宗が日本に渡つて來た、夫れからして今では、天

一 休 利 尚

之れを佛心宗と云ふ、本來の面目を守りて自己の本分を顯はし
 見聞覺知に着せざるを無一物とし、機に對して同示するを公案
 と云ひ、詞を以つて説かず、文字を以つて述べるを宗旨にす
 るのぢや、其處で釋尊の教へについて來て、此處を云ふ所
 離れたのは即ち禪宗ぢや、他の宗旨とは少しく異つた所がある
 其れで宗純が、今しも水際まで餌に付いて來て離れたのは、其
 の魚の心はさて措いてぢや、其れも吾れ一人ならば言はぬが、
 天台宗の僧が居ると見たから、謂はゞ宗純が愚弄た様なものと
 見ねる、其れを知らずに只だ餌にかゝつたのであろうと云ふた
 のは、全く一を知つて其の二を知らぬ天台宗の僧が、未だに修
 行の未熟なのぢや、そこで宗純がベカッコをしたのは、お前達
 の様な人には付き合はずとも宜しいと云ふ事を、詞を以つて述
 べずに、其の形體を以つて彼れを嘲弄した所は、子供の惡戯と
 は言へ、何に事も辨へて居る所は、中々年の長けた近來の俗僧

一 休 利 尚

台宗の中から日蓮宗、俗に法華宗と名くる宗旨が出來たが、素
 と法華經は天台宗のもので有つて、今法華宗と言へば日蓮宗の
 様になつて居るが、全くは天台宗から出たものぢや、淨土のう
 ちからも親鸞上人と云ふ人が一派を開いて、之れを淨土宗と云
 ひ、或ひは一面向宗とも稱して居る、俗に云ふ本願寺派は是れな
 のぢや、又一遍上人の眞宗、是れも淨土から出たものぢや、或
 ひは此の洛内には虚也堂と云ふものがあつた、皆之れ淨土の別
 と云ふ様なもの、其の他彼の宗旨より分け、此の宗旨より彼れ
 を出だし、夫れ々皆分派して、何れ本山と稱へて居るが
 既に吾が禪宗も夫れ々皆分派して、何れ本山と稱へて居るが
 と云ふのは三禪師と申して、即ち達磨、惠可、普眼を指す、今
 日宗純が嵐山に於いて云つたのは、此の三禪師の事を云ふたの
 ぢや、その禪は教外別傳にして、文字を以つて建てず、直
 ちに人心を指して見性成佛とする事、達磨大師の宗派である、

御弟子をシロリお見渡しに相なると、中に宗純が居りません。養宗純や、と、お呼になる、お弟子の鐵梅はチヨコ、と本堂の方に、駈け着けて参りますと、只だ一人本堂にチンと座禪を組んで、差し俯向いて居られるのは例の宗純でございませす。鐵「コレ、宗純殿、御師匠様が召します」と、云はれて、宗「ハイ、只今……」兩眼を見開らき本尊へ禮拜して、其の儘師の御坊の居間へ、タタ、と駈けて参り、兩手をつかへ、宗「お師匠様、何にか御用でございますか、養「オ、宗純か、能く参つた、恐僧は今参るぞよ、宗「ハッ、して御師匠様には何處へ……」養「ウム、極樂へ……」宗「其れは、何に仕に……」師の坊も其れには辟易して仕舞ひました。養「左のみ用事は無ければ、宗純彌陀を助けに行かちやアなるまい」と、答へました。すると宗純は大音に「善哉々々」と、手拍子打つて踊り出しました。師は莞爾とお笑ひなされて、其の儘其處で御臨終に相成

りました。随分亂暴な人で、死に垂々としてござる師匠の前で踊ると云ふは可訝いやうでございます。是れは宗純に充分考へのある事で、臨終に至つて師匠が我れに御用のありそいな筈はない、何んな者でも生きて居る間は情慾と云ふものがありま

す、我が肉身の子でなくとも、弟子と成りますれば可愛い事は我が子も同然、況して宗純などの機な、お弟子に相なると、又別段に心をかけられて居られます、それが臨終の際に顔を見せては如何云ふ事に成らうか知れんと、平生は悟つて居らるゝ師とは言へ、其の情に苦しめらるゝを氣の毒に思ひましたから、態と避けて居られたのです、それを呼びに参りましたから斯くい

たしたのであります、サテ、是れから如何に相成りまするか、例によつて例の如く、引き續き次席に委しく申しあげます……

第八席

は夫れく法のごさいますもの、將軍御他界に相成りますれば、相國寺より御引導を申し上ぐる筈でございます。此の時宗純はツカ／＼と、引導を受けられざるは、予が罪障の餘程深き所にてあらん」と、進み出で、將軍の耳邊に近付き、宗純の世を思ひ過すは入らぬこと、若し極樂を通り過ぎては、と、一首の狂歌を口吟びました。た、將軍は將「ハ、ハ、ハ、」とお笑ひ成された、僧侶が五戒十戒など、申しまして、其の戒を保ちますのは、畢竟後の世に好い所へ生れたいとか、極樂へ行きたいと云ふ目的がございます。からで、現世を樂に暮らして、其上後の世も好い様にござります。に怨過ぎて居ります、皇室の御方は別といたして、當時太政大臣の一人の中で、第一と云はれた將軍の職にあつて、當時太政大臣は一位准三宮とまで、昇進した人が、死して又佛に成ろうとは餘りぢやと、謂はゞ宗純が戒めたのです、其處で將軍もハ

借て、紫野大徳寺の和尙、養叟禪師は八十餘歳の御高齡を以つて、遂に彼の世の人となられました、其の日は一日多くのお弟子達が寄り集つて讀經看經をいたし、翌日に至りいと立派なる御葬送を營まれる其の後宗純は、師匠養叟禪師の御遺言により遂に當寺の住職と成られたのですが、其の月の六日に至つて、北山金閣寺より宗純お召しのお使者が参りました、何にしる前將軍義滿公よりお召しの事ですから、早速に昇殿いたしました。義滿公には此の中よりの御病氣、お附きの人々も晝夜お側離れす看病いたして居ります、取次ぎの者より、宗純が参りました。と申しあげると、早速御枕邊近く宗純を召されて、宗純か、能くこそ参り呉れたな、宗「ハ、ハ、ハ、」有難きお言葉でございます、予して御病氣は如何で……、義「ハ、ハ、ハ、」汝の師の養叟には、予には先き立ちし趣を聞く、予も此の度は命數ならんと思ふ、就いては予が引導は貴僧に頼む、宗「ハ、ハ、ハ、」併し恐れながら寺院に

ツと思召しましたからお笑ひなされました、併し引導で、其の儘義満公には御他界になる、時に御年五十一歳、さて御葬送も見事に出来まして、宗純も其の御供の列に加はつたのでござい
ます、處が其の年五月十三日の事でございしますが、錢屋久三郎
紅屋仁兵衛を首め、其の他四五名の檀家の者が参りまして、皆
へい和尙様今日は……十五歳で住職ではございしますもの、
和尙様と挨拶をされて見ると、大抵の者は体裁が悪うございま
すが、其の徳が備つて居る宗純殿でございしますから、其様な事
は平氣なものです、宗「ハイ、これは能うこそ御参詣……」
と、澄ましまして居ります、久「エ、實は先住様の御法事は未だ
でございしますか、如何なされます御所存で……」宗「サア、知
らるゝ通り六日は初速夜でありました、何にしろ將軍家の御
他界、七日は御葬送、十一日の二七日の速夜には又々金閣寺へ
お召じと云ふ様な事で、遂々今日まで延び……になつて居まし

た、三七日は丁度二十日になりますから、此の日は皆さん
御参詣をして頂かうと思ひます、久「へ……其れは結構でござ
います、夫れでは私共から檀中へ通告ませう、宗「イヤ檀家は
かりではございませぬ、自他宗の區別なく、皆一般の衆に参詣
をして貰ひませう、甚だ御苦勞ですがお前さん方の内、若衆な
り手代なり、手の空いた人を貸して下さるまいか、回章と云ふ
と餘り大層です、皆一時に差し紙にしてズツと配つて貰う
事にいたしましたませう、仁「へ……夫れちやア皆んなお書きになり
ますか、宗「イヤ、ナカ、書いては居られませんが、版に刻
し摺らして配らせませう、久「でも和尙様、餘り六ヶ敷くは分
りませぬ、檀家の皆々も大業な事をするとは思ひましたが、
と云はれて、檀家の皆々も大業な事をするとは思ひましたが、
年こそ若い、奇人云ふ評判を博つた宗純のする事ですから、
久「左様なれば、明日若者を寄越しますでございませう」と、其

の儘皆々立ち歸りました、跡で宗純は版木屋をお呼びになりまして、厚朴版を三面ほど彫らせ、翌日朝までに何萬枚と云ふものを摺りあげました、其の内に追々若衆は出かけて来る、宗大に御苦勞、何卒是れは洛内ばかりでなく、洛外山城は素より、近江、丹波、若狭邊り、それから攝津國、河内大和、若十里界隈、イヤナニ出来るだけ遠くまで配つて下さい、若、其れは大變長まりました、出来るだけ一つ遣りませうと、若者は皆々四方に手配りをいたして、之れを配り歩き出した、斯くて當日二十日と相成りますと、未明より多くの檀中は出て参り、大宮通り大徳寺の表門を這入つた所に、竹にて柵を造り、参詣人一ト切り百名宛を本堂に入れる事に致しました、其のうちにはチャーンと打ち鳴らす半鐘を相圖に、係りの者は

係「サア、皆さん此方へお通り下され、皆へエ……有難うございます」と本堂へ詰めかけます、尤も他宗の者も多くございす、夫れ、本堂へ昇りますに柵がある、正面には釋迦の一體、周圍には木造りの蓮華、金剛の打ち敷、其の他天蓋或ひは何々と、ズツと飾りつけまして、誠に奇麗でございす、前の處に先住養叟禪師のお位牌が安置してありまして、其の前に大きく「養叟供物等一切禁止候事」と記した紙が貼つてございす、参詣人はこれを見まして、甲「何うです、ゑらい者ぢやアないか、これを見なさい、他の宗旨だと、ヤレお冥加錢だとか、ヤレ何んだの彼んだのと云つて、坊主は物を取る事ばかり考へて居る、其れに引きかへ法事に人を呼んで、御馳走するは、錢を取らないとは、禪家と云ふ宗旨は有り難い宗旨ぢやアないか、乙「左様やアな、未だ和尚さんは十五歳だつてぢやアないか、ゑらい者ぢやアな、今にはゑらい坊さんになるだらう」と皆々感心をして

休 和 尚

拜禮終りてお座敷へ通りましますと、グウトツと香の圖の如く、
 兩側に脊中合はせに向させに膳が列んで居ります、折から墨
 染の法衣を着て宗純和尚、チヨコくツと出て参り、宗「ハイ皆
 さん、能ふこそ御参詣下さりました、何卒お膳にお座りを願ひ
 度うございませう、皆「へエ……これは有難う存じます、御馳走様
 でございます」と、禮を述べ座つてチヨイと飯椀の蓋を取る、
 また汁椀の蓋を除つて何人もフ、ンと笑ひ出す、甲「金兵衛さん
 最う参りませうか、乙「チア参りませう、大きに和尚様御馳走さ
 までございませう、宗「何うぞ宜しうお上り下され、一同の者が
 歸らうとする内に、チャーンくど鳴る、すると次ぎに控へて
 居ります百名が這入つて参り、膳に座り同じく蓋を開いて見て
 皆クツ／＼と笑つて歸る、然う斯うする内に、彼れ是れ最う日
 の未刻時分まで、凡七八千人、殆んど一萬人に近い人が通りま
 して、今は少しく隙いて來ました、檀中、錢屋、久三郎は、久和尚

休 和 尚

様、お草臥成すつたでござりませう、宗「イヤ、皆さん大きに御
 苦勞……何卒皆さん膳にお座り下され、久「チア皆さん、御馳走
 にならうぢやないか、皆「其れでは、よばれる事にいたしました
 大きに御馳走様でございませう、皆「蓋を開けて見て驚さま
 した、久「和尚様、三七日の御馳走は是れでございませう、宗「左
 様ぢや、久「馬鹿らしい、此様な事を爲なされて、皆んな怒らす
 に歸つたが、若し錢でも取らうものなら、其れこそ大變な大騒
 動です、斯の様な事を成さつては酷うございませう、宗「其れでも
 判然と差紙に書いて置きました、久「へエ……夫れでは其の差紙
 を最う一度拜見いたしませう、宗「チアく、讀んで見やつしや
 れく、檀家の一人は彼の案内狀を手に取り上げて披いて見ま
 すると、
 こうじやう
 じしやう、みなぬかの、ぶつじ、あひつじ

一 休 和 尙

め、まをしたく、さふらふにつき、じたしうの、しやへ
つなく、きたる、はつか、あけむつごきより、ごさんけ
い、なしくだされたく、みぎ、ごあんないのため、かく
のごとくに、ごささふらふ、いじやう、
たいし、せいせん、そなへもの、いつさい、おんこと
はり、まをしさふらふ、
だいくじうち
しんじゆあん

と記してございます 檀家は是れは和尚様、何んでございます 宗
見らるゝ通り、假名で書いたら能く分るであらう 檀家でも、假
名も格外甚うございます、こうじやうと云へば、口の上とお記
き成さつたら誰れでも讀みます、餘り馬鹿々々しい此の様な、
宗「ア然う云はずと、最う一遍讀んで見て下され 檀家」エ、何
ん通でも讀みます、こうじやう、一つ、このたび、ししやう、

二 休 和 尙

みなぬか…… 宗「其處々々、それぢやによつて見やしやれ、此
通り皆様々々「ア、みなぬかの佛事で茶碗も膳も皆様だらけ」
と一同は笑ふて逃げ歸つて仕舞ひましたが、是れは冗談のみで
はございませぬ、釋尊も「縁無き衆生は度し難し」と申された
るが如く、川の向ふ岸に居る者に、法を説く事も物を致へる事
も出来ませぬ、總て世の中の人々が、誰れ彼れは善いとか、惡
いとか申しまするは、詰り其の人を頓着して居るからで、若し
頓着して居ないならば、善いとも惡いとも申すものではござい
ませぬ、其れと同じ理屈で、あの坊主は妙な奴だ、可笑い人ぢ
やと評判が立ちましたらば、其の人は來るであらう、來たなら
ば其時に、法も説いて聞かせよう、物も教ねて遣らうと思ふ考
へから、宗純和尚も然うなされたのでございます、ツマナ他が
ア、立派な身装だ、地密な衣物を着て居るとか云ふ、又は意氣
な扮装をして居るとか申して、讚める人は十中一人よりござ

一 二 一 一
休 和 尙

いません、先づ夏の熱い時分でございまして、薩摩上布で當
今なれば四五十圓もしよう云ふのを着て、リュツとした博多
の帯を、別染の縞の羽織でも着て、何にから何にまで氣を付
けて好いのを撰び、歩いて御覽遊ばせ、只一通り好い身装を
して居ると云ふので、十人の中五人までは振り回つて見ますが
然し紅木綿かなんかの着物に、白木綿の羽織でも着て、靴と下
駄を片膝にでも履き、日和の日に番傘でも差して市中を往
來して御覧なさい、百人が百人ながら、彼の野郎は狂人か、何
うかしたのかと、子供などは後に附いて歩きます、其の様な風
体をして二三日も歩いて御覧なさい、往來では顔を知らぬもの
はない位になります、是れ人間と云ふものは、即ち證據でござ
います、然れば宗純殿も、先住職の三七の佛事に、糠を喫はして
衆人に宗純、結名、一休と云ふ僧侶のあることを知らしめたのは

欠

MISSING

早速に馳けて参り、利「サア和尚様、此の履物を……」と、己れが
 履物を片足に、禪師に與へ、携さへて來たる藁を以つて鼻緒をたて
 上げました、禪師は只だ「ハイ、ハイ」と、其の儘で
 行き過ぎた、仕舞う、背後を見送つて居た八百屋の利助、老爺は、
 利「チヨツ、馬鹿な坊主だ、人に鼻緒を直さして禮も言はずに
 行つて仕舞ふなんて、其様な事があるもんか、彼奴は餘ッ程、
 腐り坊主の粗坊主だ、何に、吐いて居る、所へ丁度通りかよ
 つた織屋の竹齋、竹利助、何に、貴様怒つて居るんだ、利「何に
 をツて貴下、この向ふの大徳寺の和尚さんね、彼奴を皆んなが
 活佛だ、今、仰つてお在だが、あんな分らない糞坊主はあり
 ません、今、其處で鼻緒を切らして難儀をして居るから、可哀そ
 うだと思つて立て鼻緒を切らして難儀をする、ハイ、ハイ、其の儘
 禮も何んにも云はれたくは無いが、何んとか云ひ様もあつたもんでさ
 などは云はれたくは無いが、何んとか云ひ様もあつたもんでさ

ね、實に呆れた坊主です、あんな糞坊主はありやしませんや、竹「コレ、其の様な事を云ふものでない、併し他人の世話になつて禮の一言も云はないのは、其りア禪師が悪い、今にお歸りになつたら、又私しが能くお話しをして遣るから……」と八百屋利助を宥めて織屋竹齋は禪師の御歸院を待つて居られましたが、お話し變つて一休禪師は、鷹ヶ峰へお出でになり梅屋藤兵衛の家を探しましたが、檀中の者には遠ひございませぬから顔は能く知つては居りますが、未だ宅へ行つた事はございませぬ、切りに探して居りましたが一向に知れ無い、然う斯うして居る内に、彼の蛭川新左衛門の屋敷の門前まで参りました、流石は寺社奉行の屋敷でございします、ナカク立派な普請、門を潜つて玄關に行き、一休「頼まう、玄番「ドーン」と、早速に出て参りました、執次「これは誰方でございします、一休「ア、新左衛門殿御在宅かな、拙僧は大徳寺の宗純ぢや、執次「へエ、暫らくどう

ぞ……」と、執次の者は早速この由を奥間へ申し入れました、之れを聞いて驚いた蛭川新左衛門、さては朝から催促に來たなと思ひましたから、早速玄關へと飛び出して参り、新「これはこれに能うござい、サア、何卒禪師には此方へお通り願ひます」と、いと丁寧に低頭した一休「ア、鍋の月代はまだかな、新「未だ考へ中でございます、一休「ア、そんなら、一寸待つて居る間に存じありますまい、假りにも寺社奉行の職を勤めてお出でなされる方が、梅屋の宅などを御存じはありますまい、其處で蛭川新左衛門殿は、御家來を呼んで、新「梅屋藤兵衛の宅まで禪師を御案内申せ」と、御申し付けに成りました、早速家來兩名は、禪師を御案内申して、梅屋藤兵衛の宅まで参る、見ると二間間口の汚ない梅屋でございします、主の藤兵衛は、カチンゴトンと頻りに箆を振めて居るから、禪師は門口より一休「ア、藤兵衛殿の

一 休 和 尙

何な様子であらうかと、來もせぬ事や過ぎ去りし事を憂いて、心を惱まし身を苦しめる、これ皆十惡で、其處を悟らねばならぬものであります、「行く先の宿を其處ぞと思はねば、踏み迷ふべき道もなきかな」と我が怨を捨て、我れを離れて仕舞ひますれば、所謂無念無想と云ふ事で、即ち則ち悟れるのでございませう、是れを承はつたる「蠅川新左衛門は恐れ入つて居ります一休「如何やな、新左殿、鍋の月代が判らねば釋いて進せやう釋尊が驚の靈山に於いて七十歳の御時、五時を説かれた、華嚴阿含、方等、般若、法華、其の後滿八十歳の御時に、毘提河純陀が宅にて、涅槃經を遺誡され入滅せられた時に、依法不依人の語を殘された、法によつて人によらず、これ釋尊の名言で、今の人も能く心得ねばならぬ事である」と云はれた、此の佛法の鍋の月代石の髯と言ふ可笑い様ですが、諸君の御宅の彼の籠にかゝつて居ります鍋釜、彼の裏へ鍋釜が溜ります、釜の

一 休 和 尙

裏は釜釜とは云ひませんが、鍋が本家と見なしまして何んでも鍋、其の鍋釜を取らずに置きますれば、火の用心も悪うございまずし、第一もの煮方が遅うございまして、薪などが餘計に入ります、それで折々には摺り落して使はねばならぬもので、丁度人の頭を剃る様なもの、之れを鍋の月代を剃ると云ふ事は、詰り鍋釜を落す事でございまして、それから石の髯、彼の手水鉢、或ひは石燈籠杯に苔を生ず、之れは水を掛けて成るべく苔の生るやうにいたしました、若くは取らぬ様にしなければ、世拂はねばならず、石の苔は取らぬ様にしなければならず、の様に説いた、鍋の月代と石の髯とは是れだけ反對になつて來ます、其れば繪に書く竹の共すれの音といふのは、書工が心して書いた竹が書と書が摺れて居る、音こそ聞へませぬが、風に動いて居る様に見ゆるのは、即ち其の書工の力、世に謂ふ心とは即ち是れです、故に佛法の極意は、或ひは取り又は取らず、

一 休 和 尚

取捨の間に善悪が分れて居ると云ふ事を説かれたもので、聞き様が悪いと、何んだか可笑く聞へますが、全く世の有様を説かれたものでございませぬ、この説明を聞きましたる所の新左衛門はますく恐れ入り、低頭平身に及びました。新ハッ、誠に恐れ入りしました、何卒今日より御弟子の中に加へられまして、其の修行を……一休「否々、夫れは不可、新ではお弟子にして下さることは出来ませぬまいか、一休「左程弟子に成りたくば、弟子にもして遣らぬが、イを取つて来い、新「ハイ、何んでございませぬ、一休「解らぬか、解らずば二三日考へるが宜からう、分つたら弟子にもして遣らう、新「ハイ、有難うございませぬ、お話しも了り門前まで御見送りをいたしました、禪師は新左衛門に袂別を告げて竹齋殿の門前まで歸つてお出で遊ばすと、待兼て居たのは織屋竹齋殿、一休「オ、竹齋殿か、竹「サア、先にお遣入り遊ばせ

一 休 和 尚

最前から長らく待つて居りました、一休「ア、左様か、マア此方へお遣入りと、同道して御部屋へ通る、一休「コレ竹齋殿が見れたお茶でも煎れる、何か御用か、竹「エ、實は色々伺ひたい事があつて出ました、貴僧にはお似合ひなさらぬぢやアございませぬか、貴僧先刻御出ましかけに、鼻緒が切れて、向ひの八百屋の利助が大層怒つて居ります、鼻緒を直して上げてたの、一ト言の禮をも仰しやらず、不都合な事である、和尚様が歸つたら、打つとか擲ぐるとか云つて、大變に怒つて居ります、一休「ハ、アイヤ、其れはるらい間違ひぢや、拙僧は誠に嬉しく思つて居りました、竹「其様な事がありますものか、夫れ程有難く思召したら、何故禮を仰在いませぬ、一休「イヤ、竹齋殿、あなたには有難いと辱けな

辱けないと云ふのは、只だ物を貰ふたり世話に成つたりして、
 品物の禮では済まぬ、其處で有難い世話になつたら、言葉の禮や
 たい、夫れ故禮を言はなかつたのぢやと、斯う仰しやつて居る
 で、お前言葉で禮を言ふて済むならば、和尚様を伴れて来て禮
 を言はそうか、利「イヤ、一寸お待ちなすつて、ぢやア何んでご
 ざいますか、言葉の禮や、品物の禮では済まぬから、未來の爲
 めに成ると云ふ其様な禮の仕様が有るので、竹「サア左様ぢ
 やげナ、利「それぢやア其の方にして貰ひませう」と、同道して
 お寺へ出て参りました、是れが一休禪師のお力のある所で、初
 めの間は何にしろ皇族を出で、大徳寺で御出家をなされ、今
 日まで師の爲めや、道の爲めの御修行はなされましたが、人
 の交際と云ふ事は知つて居られませぬ禪師でございますから、
 何んとなき氣高くもあり、御所内を出で、寺に御座りなされ、

有難いと云ふは、またあるまじき事を云ふたものだ、有り易い
 と云へば何通でもある事ぢやないか、當寺の檀家ではなし出入
 りではなし、只だ謂は、至の他人、其の八百屋さんが汚ない履
 物を直して下された、誠に嬉しかつた、言葉の禮や品物位ゐるの
 禮では済まん、何うぞ未來永久彼の仁の爲めに成る事をと斯う
 思つた、それで禮を云はずに歸つた、が言葉の禮で済むなら、
 今會つて禮を云はうかナ、竹「チョツ一寸お待ち下され」と、止
 めて置いて、竹齋は飛び出して参りましたる八百屋の宅、竹「利
 助殿、いま和尚様が御歸りなすつた、マア能ふ聞かつしやれや
 怒つては不可、和尚様の仰るには大層喜んで居らつしやる、
 利「何んの、彼の藁坊主が喜びますものか、竹「けれども利助殿
 お前有難いと辱けないと云ふ區別を知つて居るか、利「其リア誰
 だつて有難い辱けない位の事は知つて居ます、竹「イヤ、然う
 ぢやない、有難いと云ふのは、又と再びない事が有難いのぢや

ツイ門前に居る細民共は、御自分から見れば家來の様な心持ちがして在つしやつたのです、よつて廢物を直して呉れたのも、門番や飯煮に對ふも同じ様に、只だハイ、と惡氣もなく、其の儘にして鷹ヶ蜂へお出でに成つたのです、處がお歸りになつて見れば、鼻緒を直して呉れて禮を云はないから、大變に怒つて居るとの竹齋の話しを聞いて、不圖お考へなすつた、これは人の世話をして禮に來ないからと云つて、怒る様な人間では小量で、心得方の悪い奴だ、こりア少し人間の道を教へ、且つ心得違ひを悟して遣らねばならぬ、と御考が付きましたので、幾らでも斯くは申したので、兎角人間の慾は限りがないもので、幾らでも上に上の慾の附くものですから、未來永々の爲めなら行つて見やうかと、利助は出て參りましたので、是れは最う一人一人を濟度する所の方便で、未來永々の爲めに、今日一日では解らぬから緩々御出でと、是れより日々に招いて、法問を説き人の

様を話して、遂にはこの慳貪邪見な利助も、信心氣と云ふものも出來、荒くれな事もしない様になりましたが、是れ全く佛法の方便でございませう、御話し後に戻りました、一休禪師は新左衛門に「いの一條が解つたのか知らん、甚だぢやらうと待つて居らつしやると、丁度十五日目に新左衛門は眞珠庵に出て參りました、新禪師……一休「ア是れは新左か、新「ハイ漸やくの事、で「イが棄てられました、一休「ハ、ア解つたと見へるナ何うして取つた、新「左様手前は退役の願書を出し、悴の新右衛門に家督相續仰付けられる様になりました、私しは隱居の身と成つたのでございませう、斯く申したばかりでは、一向解らぬやうでございませうが、そも侍と云ふ字は「イに寺と云ふ字を書きます、其處で佛門に入るのは侍と云ふ字は「イに寺と云ふ字を書きます、其處で佛を取れば寺と云ふ字になる、と云ふ一休禪師の謎でございませう、

新左衛門早やくも之れを察しまして、退役願を出したと云ふのも、是れ學者丈けの事はございませぬ、總て禪家の問答などは形體問答、或ひは文字を拆いた問答などが幾らもございませぬ、佛は什麼人にて非ず、僧は什麼會て人なりなご云ふものも皆文字に拆きましたるもの、一體様も成心なされて「休流石は新左衛門新併し禪師、お弟子になりましてたからは頭を圓めませうか」休「ナアニ夫れには及ばぬ、恐僧は看板ぢやによつて頭を圓めて居るが、お前は其の儘でよろしい」と早速に「さとりなば頭髪を剃るな魚肉食へ、地獄へ往つて鬼に負けるな」新「成程、併し餘り髪長のものも不釣合でございませぬから」と、言つて脇差を抜き、鬚の髻から黒髪をブツリと斬つて仕舞ひました尤も其の付際は鬚に云ふ程でもございませぬ、獨り立と申しましたので、髪を纏め根の所を結で結びました後ろに下げたものでございませぬ、ソレを斬つたので、日本の断髪元祖は嵯峨川新左衛門だそうで、餘りアテにはなりませんけれども……其處で其の翌日から眞珠庵に参りまして、禪學修行をする、又奥方お辰どのが良夫新左衛門と諸共に禪學の修行をなされて居ります、茲にお辰どのがいよ／＼禪門修行の上、女達磨の姿を現はしますお話しと相成ります、餘り長く成ります、故、一寸一息いたしまして次席に申しあげ、事に致します……

第十席

茲に嵯峨川新左衛門の奥方辰子どののは、良人と同じく近頃は、只だ禪學にのみ心を寄せ、色々佛書讀んで喜んで居られました、が、或る時、良人新左衛門に向ひ辰貴郎少しくお伺ひ申した、す、世に女人成佛は出来ぬものだと申しますが、妾は出来ぬ、ない事はないと存じます、如何なものでもございませぬ、新「ア、それはない……其方の云ふ通り女ぢやからとて、佛に成れない

一 休 和 尙

和尙様、蟻川の奥様が見えました。一休ア、左様か、チア、此方へお通りなさい。辰「ハイ、御免下さいまし、此の間中は失禮をいたしました。さて和尙様に一寸お伺ひ申します、世に女は成佛が出来ないものでございませうか。一休「ハイ、其れは出来ませぬ。然し禪師、お尋ね申します、本来の古郷もなき我れなれば、死に行く方も何にも彼もなし。一休「行く水の數かくよりも慕なきは、佛を頼む後の世の人。辰「世の人の罪かしみ程しるすなら、閻魔の帳に付け所なし。一休「運なうて雲の上には昇るとも、恩鈍の經は頼まれもせず。辰「ハイ、して禪師、法佛の極意は如何なるものでございます。一休「心の見やうちや。辰「その心とは如何なる事を云ふやらん、墨給に書きし松風の音。一休「ウム、其りやよい道歌ぢや、心とは銅の月代石の鞆、火打ち袋に炭の聲。此れは分りません、總て法教家は色々な道歌を詠みますが、一寸聞いた位では分らぬものが幾何もありませぬ。掘らぬ井の溜ら

一 休 和 尙

と云ふ事はあるまい。辰「其れでは妾し一應大徳寺へ参りまして禪師にお尋ね申して見やうと存じます。如何でございませうか。新「ウム、行つてお出で、然し師の御坊の仰しやる事、爲さる事に付いて、何の様な事をいたされようとも、又仰せ付けられ様ども、決して固辭ことは出来ませぬぞ。御無禮を申しあげてはなりませぬぞ。釋尊が檀特山に御修行の難行苦行、誓の行を色々なされた事は、お前も聞いたり讀んだりして知つて居るであらう、よつて少々氣に入らぬ、心に叶はぬ事を言はれても、師には従はねばならぬ、これだけは申して置きますぞよ。辰「ハイ、畏まりましたしてございます。と、四十路の上は越して居ります。が、扱女の省愼、身繕ひをいたしまして、供をも伴れず只一人、我がお屋敷を背後にして、やがて大徳寺の玄關へかゝつて参りました。お辰ごのは。辰「ハイ、お頼み申します。執次「ド、オ、是れは入來しや、何卒此方へお通り下され、アノ

一 休 和 尚

ぬ水に浪立ちて、影も形もなき者が汲む。堀らぬ井戸で、溜らぬ水に浪立ちて、影も形もなき者が汲んで居ると云ふ、これは諸君お解りになりますか、一寸お解りにならない様でございませす、委しく解きますと、甚だ長く相なりませすから、こゝでは略いたして置きますが、俗に言ふに言はれぬ事がございませう、この火打ち袋に釜の聲と申す句は、一寸解りませぬ、暫し辰子殿も首を傾けて考へて居ります、禪師は此の体を見まして「休、ア、御家内、お解りにならぬか、解らねば宅へ歸つて新左殿にお尋ねなされ、辰「ハイ……其れでは其れが分らねば、女人成佛は成りますまいか、一休「イヤ女人成佛はさして進せる、ア此方へ来さつしやれ」と手を取つて本堂の裏手へ伴れ行きませした、晝間ではございませす、深閑として誰れ一人も居りません、一休「アお辰殿、帯を解かつしやれ」と云はれましたが、瑠て家を出る時の良人の言葉を思ひ出し、辰「ハイ」と答へて帯を

一 休 和 尚

解きました、上下の區別はございませす、御婦人の腰の周圍ほご五月蠅いものはありませぬ、細帯の數、三筋も四筋も巻いてあります、辰子殿は師の言葉に従ひ悉く解き捨てました、然し裸体にも成れませぬ、前を掻き合はせて居りますと禪師は「休、其の衣物を脱がつしやれ、辰「ハイ」と視一つに相成りました、一休「其れを取らつしやれ、辰「それは禪師、如何にも無禮な事でございます、一休「イヤ、解かつしやれ」と禪師自ら二布に手を掛けてお取りなされ様とする、怒つたのは辰子殿、辰「何にをなされます」と忽ちの間に其處へ脱ぎ捨てたる衣物を肩に掛けるが早やいか、帯をばキリ、ッと腰に巻き、結びもやらす其の儘で、ブーイと戸外へ駆け出し、スタ、と鷹ヶ峰の御家敷へと立歸つて来た、辰「只今歸りました、新「オ、辰子如何いたした、辰「何したとございませす、貴郎様はよく彼様な者に能く御信仰遊ば

いか、その我れの言葉に背いた其の方、今から暇を取らず、ア何處へでも出て行けッ」と大層御立腹をなされ、即座に離縁を誓いて辰子どの前に投げ付けました、意外の良人の言葉に驚ろいたが、致し方もなく奥方辰子殿は、泪を拭ひ再び衣類を着替へて、再び大徳寺へと歩つて参りました、辰「お頼み申します、執「ドレ……オ、和尙様、また蜷川の奥様がお出でになりました、左様か此方へと申せ、辰「和尙様、先程は誠に失禮をいたしました、良夫ある身として、例令へ御僧なりとも男子の側で肌をは見せるものではないと、豫ね、心得て居りました、瓜田の靴、李下の冠とやら申す該もあり、慎んだ上にも尙ほ謹まねばならぬ者は、女の身と存じて居りますから貴き御坊のなさる事とは思ひながら、餘り無禮な姿、其の儘立ち歸りました、失禮の程は御容赦を願ひます、最早や良人に離縁をされました、

しました、只今妾しがり参りましたら、實はこれ、斯様、古歌を詠みて色々とお尋ねを申せば、また古歌だの御自分のお詠み遊ばした歌で御返答がございました、終ひには心とは鍋の月代石の髻、火打ち袋に、鶯の聲と、狂歌とも何んとも妾しには解りませぬから、暫らく考へて居りましたら、歸つて貴郎に尋ねよとの事でございまして、それから其のお歌が解りませぬば、女人成佛は成りませぬかと申しましたら、否々其れは救わて進んせる、サア、是れからが腹が立つたのでございませ、新「如何致した、辰「ハイ、本堂の背後へ伴れてお出で遊ばして、あらう事かあるまい事か、僧侶の身と妾しの衣物を脱がして、全の裸体にしてお仕舞ひなすつたのでございませ、餘りの事でございませ、私から、其の儘立ち歸つて参りました、新「コレッ辰子、如何汝は私しの云ふ事を聞かぬ、ウム例令どの様な事を仰せられやうども、又なされやうども、師の言葉に背くなど申したではな

て、一人の身と成りました上からは、猥褻がましい事さへなく
 ば、例令男子様の御側に居りましたも、構ひますまいと存じま
 すれば、サア何卒身体の御検査をなされて下さいまし」と、保
 險会社にでも行つた様に、忽ち帯を解かうとする「休」サア最
 宜しい、ハッハ……新左殿に離縁を貰はつしたか、それ
 でこそ最う女人成佛ちや、女は五障三從、幼にしては父母に
 ひ、嫁いでからは夫に従ひ、老いては子に従ふとある、飾りを
 て、尼にならずとも、其の儘で立派な女人成佛が出来たのちや、
 ア、結構、たつ「其んなら、是れからお寺にお置き下さいませ
 るか、休」イヤ、當寺には婦人は置けぬ、拙僧が手紙を付け
 るから、お前の兄弟子の宅へ行かつしやれ、たつ「ハイ」其處で
 師は片邊の硯を取つて墨摺り流し、何にかサラ、お認め遊ば
 した一通の書面、休「サア之れを持つて、鷹ヶ峰に蜷川新左衛門
 と云ふは拙者が弟子、其處へ行つて世話にならつしやれ、たつ「へ

ッ、有難う存じます」と喜んで其の儘立ち歸つて参りました
 やがて玄關へ掛かりまして、たつ「お頼み申します、執「ドレ……
 オヤ奥様、お歸り遊ばせ、たつ「イエ、妾しは當家の奥ではありませ
 の、辰子と申します者、師の御坊の御手紙を持つて参りまし
 た、何卒新左衛門殿に宜しく御執次を願ひます」驚いたる所の
 執次、何にが何やら隆張り解りませんから、執「へエ……」と奥
 へ参つて、執「御前へ申し上げます、只だ今奥様に能似たつ子
 様と云ふ御方がお出でになりました、此の手紙をあなた様へと
 ……」蜷川は書状を手に取り上げて讀み終り、新「アム左様か、
 何卒これへお通し申すやうに……」辰子殿は蜷川の前來たり
 兩の手を支へ、たつ「何卒今日より何分御厄介ながら、宜しう願
 ひ申します、新「ハイ、御遠慮なく御逗留下され」と、聞いて
 家來の衆は益々驚ろいて、奥様と主公様と俄かをしてござると
 不思議に思ふて居る、處が此たつ子殿にはます、御學問をな

されて、座禪を組んで在つしやいました。この姿を出入する或る畫工の描いて置きましたのが、そも女達磨の始まりでござい
ます、所がお話し變つて、茲に宇治郡大和田の郷に、森田金太
夫と云ふ郷士が有つた、先づ大和田にて第一等とも云ふ金満家
當家に一人娘が有り、始終身躰が悪く、何の疾とも分りません、
一家の者も大きに心配をして、親族にあたる姥川新左衛門の許
へ来たつて、娘の病氣は如何なる次第であるやを、萬望禪師に
お見別を願ふて頂きたいと云ふ、此の事を新左衛門より早速禪
師にお話しをいたしますと、一休宜しい見て進せる、委細心得
た、新ハツ有難うございませ、然し禪師、お出で下されませ
れば、餘り粗末な姿では先方では喜こびませんから、何うぞ機
立衣金襴の袈裟と云ふ様な、少し立派な姿で行つしやつて頂
たいのでございませ、一休左様か、そんなら最う廢めた、何にも
身躰を着飾る程の事には及ばぬのちや、此の儘なれば行つて遣

ろ、新其様な御意地の惡ひ事を仰しやつて、其れでは斯様い
たしませう、貴僧平常の墨染の衣でお出で遊ばせ、私しは御行
列と云ふ積りで、御乗駕の中に法衣を入れまして、先き廻りを
いたして居ります、其處で立關で其とお召換へ下されましたら
宜しうございませ、一休「ヨシ、然うしやう」と、約束をいた
されて、新左衛門はチャンと立派に法衣を持つて行きます、
禪師は約束に後れて参ります等の所、疾に支度をしてお出まし
になり、早やくから森田金太夫の門の所へ来て見ますと、盛
り砂簀目、立派に掃除が出来て居ります、然るに禪師は一向無
頓着でございまして、其の立派なる盛り砂の上を踏んで通りま
す、下男「コレ、坊主々々」行き過ぎたかと思ふと、また立ち歸
つて二度三度、下男の言ふ事を耳にも入れず、彼の盛り砂の上
を踏み付けて歩いて居られます、之れを眺めたる所、下男は、
怒つたの怒らないの候の權八さんちやアございませ、下男此の

乞食坊主奴、乃公が折角掃除した所を斯様なにしやアがつて、
 と、恐れ多い事ではございませうが、汚い妻をなされて居られま
 すから、一休禪師と知ろう筈はない、突然、拳固で禪師の横ッ
 面を一つボカリ毆倒した、禪師は踏眼々々となされ、片
 傍の大溝の中へ横倒しに陥りました、其の儘で禪師はお上りな
 されやうともなされず「一休、オ、オ、オ」と、云ひながらシッ
 として居られる、下男は「下男、エッ、此奴酒にでも食ひ酔つて居
 やアがるんだな、仕様の無へ坊主だ」と、云ひながら、門前
 片付け、慕張りをして門内へ這入つて仕舞ひました、サア此の
 騒動が如何に相成りまするか、例によつて次席に申しあげます
 る……。

第十二席

偕て、暫時すると、蠶川新左衛門は馬上に悠々と召され、禪師の

お乗り遊ばすべき乗駕を擔がしてやつて参ります、豫ねて親族
 の知り合ひでございませうから、家來共は皆出迎へる、門内へ馬
 を乗り入れ、馬から下りて新左衛門、新ア、コレ、禪師は
 未だであらう、墨染の衣を着た汚ない御坊が見ゆる筈だから、
 御見ねになつたらば、必らず粗相のない様にこれへ御案内を申
 せ、下男「ヘエ……汚ない坊主、その汚ない坊主なら、先刻ボカイ
 リツと一つ打擲つて遣りましたら、溝の中へ轉げ落ち込みま
 た、新「エ、ッ」新左衛門は大に驚愕さ急ぎ門前に駆け出して見
 ますると、禪師は溝の中に「一休、オ、オ……新アッ、
 是れは怪しからん、禪師様、一体何う遊ばしたのでございます
 ……」一休「アハハハ、新左衛門、打かれると寢宜いと人は云ふが、
 一向に寝られんなア、新「是れはしたり、其様な所に……、サア
 此方へ」と、漸くに助け起し、案内をいたして奥の間へと通す
 主人の金太夫は之れを聞いて、金「是れは怪しからん、お禪師様

を打つたなどは、一体誰れが其様な事をいたしたのだ」と、
 聞いて以て以前の「下男は、ソコソコ逃げ出して仕舞ひました禪師は
 ニコニコ笑ひ乍ら「休、イヤ、捨て置きなされ〜」立ち騒ぐ主
 人を押し止め、漸う衣物を着換へ、先づ御休息、金「ハイ、誠に
 御氣の毒様な事でございまして、何卒御勘辨の程が願はしう存
 じます」と恐るゝ金「大夫は申し上げた「休、イヤ〜、捨てよ
 置いて下され、時に如何ぞやナお娘御は……」金「ハイ、此方に
 居ります、何卒此方へ……」と、金「大夫は「休、禪師を娘の病
 室へと案内をした、此の家の娘は丁度當年十七歳實に玉を欺く
 と云はうか、少し病氣の故か顔にげんがございしまするが、何ん
 となく美しき容色、禪師はジツと其顔を見てお出でになりまし
 たが「休、コレ〜、新左、るらい美しい縹緞の娘ぢやのう、新
 シ、其様な事を仰しやつては……」休「けれども、綺麗なもの
 は綺麗、汚ないものは汚ない美しいから美しいと云ふて賞めて

居るのぢや、涎が流れる、マア、一寸一寸遍手を握らして下され
 と、羞かしそうに出す娘の手を握る、兩手の小指を確かりと握
 り「休、ア、新左、一寸見やつしやれ、新「へエ……」休「ア、今
 時の娘に油断なら櫻、今日九重と結ぶ腹帯、アハ、新「娘、
 て世は媒妁人頼み婿を呼び、其の子にかゝるは親の役なり、休
 否々、媒妁は昔の事よ、今の世は、籠よりも先に女房、金「エ、
 ……一寸伺ひますが、娘の病氣は如何でございませう、休「イヤ
 これは、姓、娘ぢや、金「これは怪しからん、禪師のお言葉とも覺へ
 ません、娘は當年取つて十七歳是れまで男子と云ふ者は、父の
 私し、他に側へ寄る者もございませぬ位、左様な淫な事出来
 ません、玉を生んで、干將、莫邪の劍を鍛つたと云ふ例しもある、之
 鐵の玉を生んで、干將、莫邪の劍を鍛つたと云ふ例しもある、之
 れは、唐土の話し、取るにも足らぬが、此の女には男がある、娘
 の姓、振に氣の付かぬ親は、棒、鱈、ぢや、阿呆ぢや」と、ツケ〜

と仰在つた金「イヤ、左様な事を仰在つても此の娘に限りまし
 ては……」一休「處が此の娘に限りましてあるのぢや、それも當家
 の者ぢやない、當年の春から此家へ宿りに来た者があるか、
 エ、其れは此處に居ります、蟻川新左衛門の次男精三郎と
 申します者が、當年々頭の禮に参りまして、五日逗留いたし
 て歸りました一休「サア、其奴ぢや、金「是れは何うも泥棒で
 も捕へる様に仰しやつては誠に困ります一休「否々、如何ぢや娘。
 其奴であらうがな」と、云はれて、娘はハツと顔を赤らめて只
 だ差し俯向いて居ります一休「如何ぢや新左「赤面をしたのは、
 娘より新左衛門、盗人を捕へて見れば我が子なりと、後世に
 云つた人がありませんが、新左衛門も當家の娘を我が子が慰んだ
 とは氣も付きませんが、新左衛門の娘を我が子が慰んだ
 居る一休「如何ぢや森田、初めてお目にかつた一休ぢやが、こ
 の媒妁人は拙僧がしやう、親族同士は重縁と云ふ事がある、新

左衛門の次男ぢや、當家に遣はすとも仔細はあるまい、如何で
 あらう」と、其處で金太夫も大いに喜びまして、色々の御禮を
 述べ、遂には禪師の厄介で、其の儘約束も整ひました、今宵は
 當家の待遇に預つて一泊をいたされる、處で翌日禪師は新左衛
 門を連れて當所を立ち出で、ブラ／＼木橋から小倉宇治の間の
 茶園などを御覽なされて、今しもお歸りなされやうとなされる
 内に、日は早や西山に傾き暗くなつて参りましたから、以前の
 森田に歸るは如何と近傍の菊屋と云ふ宿屋へ御泊りに成りまし
 た、御夕食飯を済ませまして蟻川は新「私しは一寸森田に忘れ物
 をいたしました、使ひを遣つても宜しうございます、何卒禪師には
 行つて参ります、お淋しうはございます、其れでは行つ
 お先へ御成就枕遊ばして下されまし一休「ハイ、
 てござれ」早速新左衛門は森田の方へ取つて返します、間も
 なく降り出したる大雨、ゴ／＼と風を誘ふて大暴風雨と相な

僧は喜撰のうちで食客をして居るのちや新御元談仰在います
 ……、夜が明けて参りましたから、お歸り遊ばせ」と、言つて
 居る時に此家の表口に當つて、ヒインと嘶く馬の聲、間もなく
 一人の舍人馬を下つてズイツと此家へ這入つて参り、合許せよ
 宿、ハ、イ、誰方様でございます、合其の方の宅に、紫野大徳寺
 の大和尚、一休禪師が御宿りであらう」と、聞いて主人は驚ろ
 き、直様二階へ知らせます、禪師は下りてお出で遊ばして一休
 誰れぢや、合ハッ、只今藤の侍従様御危篤にございます、早速
 御歸洛の上、御引導の儀を御願ひ申し上げます、一休、そ
 れは宜しく御断はり申して下され、最う行かぬと言ふて……」
 是に於いて使者は呆氣に取られました、御歸院に成ります、
 せんに其の儘都へ歸られ禪師は大徳寺へ御歸院に成ります、
 ると再び大内より御使者でございまして、御引導の儀は兎に角
 一應御参殿を願ひたいとある、禪師は笑ひながら、御側に在り

りました、遂に夜に入つて段々と更けるに従ひ、風雨も益々激
 しくなつて来て、近傍の小家は屋根を飛ばすと云ふ位の有様、
 洗石の禪師は少しも驚かす泰然自若として居られます、其の
 うちに夜が明けて参りますと雨風も止み、新左衛門も立歸つ
 て参りまして、新イヤ禪師、夜前は失禪をいたしました、然し
 マア大變な暴風雨で、傘をさして居りますれば飛びます、
 餘議なく森田で夜を明かしました、だが禪師には如何でござい
 ます、一休イヤ何んともなかつた、新禪師、御冗談を仰つては
 ……、彼の大暴風雨に……、一休イヤ何んともない、我が宿は柱も
 建てす葺きもせず、雨にも濡れず風も當らず、新ハ、ア、して
 禪師の御宿は……、一休「されば、我が宿は都の巽鹿を棲む、世を
 宇治山と人は云ふなり、新其れは喜撰の歌で、我が庵はと云は
 なければ、何んもなく何うも……、一休喜撰は我が庵ぢや、思
 のは我が宿ぢや、サア、喜撰は其の戸主だから我が庵ぢや、思

「焼ば灰埋めば土に成るものを、何にが残りて罪となるべき」と、侍従様は之れを見て、其の儘此の世を逝つて仕舞はれました。此の事を再び禪師に知らせますと、禪師は早速に参殿して、枕邊に於いて通夜讀經をして居られました。一休禪師が大徳寺にお座りの間、引導を頼みに参ります者數千人。○「何うか死にましたから、何卒御引導を願ひ度うございます」杯と申して参る者がございます、すると禪師は「ウム、死んだか、ヨシ之れを持つて行つて、その親父の頭を打つて見やしやれ」と、云つて金槌をお渡しなさる。○「和尚様、斯様なもので頭を打ちましては、禪「ウム、痛いかな。○「イ、エ、痛くはございますまいが……、死んで居りますから……」禪「サア、其の金槌で打つても痛くない者に引導渡したつて後の祭り、何んの役に立たぬ

引導と云ふ事は導くと云ふ事ゆゑ、人間は生き存らへ居る時分に始終法門を聞くからして、後その魂がよい所へ行ぢや死んだ者の枕許に立つて何を言たつて分るものか、無益な事ぢや、其れより早く死骸を片付さつしやれ」と、云ふ様に始終仰しやりました。禪師は藤の侍従様が御逝去に成までは、お使者が参りました。御自身御枕許に於て通夜讀經を遊ばされた、と云は一休様、思はれますが、然うではございませぬ、抑も一休禪師彼の御落飾なさる始めより、何にが爲めに出家を勧めましたか、藤の侍従様があなたは今上様の御子様とは申しながら、南朝様の御子様でありますから、今尼利の代を倒して、南朝の忠臣を取立ねばなりません、勸めた御仁です其處で其事の宜しからざる事を悟つて在らつしやるから、出家したので、然るに今大徳寺大和尚、一休禪師と世上の衆人に尊敬られる御身の

上、且つ才智人並勝れてござれば、この人をして遠俗させ事をなさしめたらばと、婦人の事から思ふに違ひない、然れば今臨終に當つて、罪を作らす様なもの、顔を見せなかつたならば罪を作る事はいと参殿を御断はりなされ、詰らぬ狂歌を書いて侍従の御心を安ませ、死を待て参殿なされたのは、充分深き御考へのありました事でございませう、處で禪師は御遺物として、白無垢を一枚御貰ひなされましてお歸へりに相成りまする、いゝの爲めに、假利天に昇つて、摩耶經をば遺戒なされた事がござ

川新左衛門は、眞珠庵へ出て参りました、其處で禪師は種々御話しが有つた末、一休「何うぢや新左衛門、此の頃聞けば比叡山延暦寺の荒法師達が、今日は大層他所の坊主と見れば困らして居ると云ふ噂さじやが、今日は一つ叡山に登つて鞠讀つて遣らうかナ、

第十三席

新「其れは至極面白い事でございませう、お供を仕ります」と其處で禪師は、釋尊の例に倣ひ、又一つには叡山僧徒を戒めて遣らうと、彼の蟻川新左衛門をお供に伴れられて、是れより叡山へ御登りに相成り、サアいよ、彼の有名の一字齋と云ふお話しに移るのでございませうか、一寸御免を蒙りまして、次席に申しあげます……。

倍ても比叡山延暦寺と申しまする御寺は、延暦七年、時の帝垣武天皇の勅命に依つて、當時の名僧最澄と言ふ人の開基でござ

います、此方は後貞觀の八年、傳教大師と言ふ大師號を賜はつた御方でございませう、餘事は備て置き一休大禪師は、蟻川新左衛門を御伴れになり、延暦寺へ参られませうと、新左衛門は此頃では蟻川とは名乗りませんから、只だ僕同様に臺所で休息、

一 休 和 尙

其の日は相惜阿闍利が大和國へ御出でになつた後でございます
 から、奥へ通られた禪師も、阿闍利が留守とあつては是非に及
 ばぬ、残念ながら山を下ろすと云ふ時に、ガヤ／＼と大勢の御
 弟子は、近頃評判の高い大徳寺の和尚だと云ふは、自墮落な
 坊主ぢやナ、あれでも學力が大變あるそうだが、一つ問答して
 見やうか、弟馬鹿な事を云ふナ、禪家の坊主は中々口が達者だ
 から、大概の雲水の僧にも説き破られる事がある、況して一休
 禪師と我れ／＼とは迎ても問答が出来ぬものか、止せ／＼弟甲
 其れも然うぢやが、何にか困らして遣る工夫はあるまいか、弟丙
 ある／＼、計略にかゝつたら、何んなるらい者でも困る、三千
 人の宗徒から、お願ひでございます、何卒一字だけ紙に字を寄
 せて下さいますやうと頼んだら、正敷否とは言ふまい、で承知
 をしたら一人前に紙一枚合せて三千枚、それを續いて書いて呉
 れと頼むのだ、さうしたら困るだらう、大勢「イヤ其れはよかろう」

一 休 和 尙

と忽ち相談が定りまして、一人の僧が禪師の側へ出て参り、甲
 これは／＼、一休大禪師、能うこそ御參詣でございました、吾
 らは學寮に居ります、天台修行の僧でございしますが、大禪
 師が當山へお入りに成りますこと珍らしいございしますが、付
 いては禪師に一つの御願ひがございます、一休「ハイ何んのお願ひ
 かな、僧貴僧は御能筆で在つしやると云ふ風聞は當山に隠れな
 く、是非に一筆頂戴いたしたい、一休「ハ、ア愚僧は悪筆ぢやが、
 御所望とあらば何になりと認めませう、僧「付いては甚だ恐れ入
 りまするが、三千人の宗徒一同から、一字だけ書いて頂きたう
 ございます、一休「ハイ／＼、イヤ承知いたしました、僧「左様なら
 ば、御願ひいたしましたる、と可笑さ懐へて臺所へ取つて歸し、
 三千枚の紙を續き、グル／＼巻いて見ますと、丸で道直しに用
 めまする、石の大きさは程あります、此巻紙へ一筆で一字になり
 ます文字を願ひ度うございしますと、これは酷い難題でございま

す、四角の紙ならば一里四方あろうとも、真ん中に一字は書け
 ますか、巻紙で三里近くも巻いてあろうと云ふのに、其れへ一
 筆一字になる字を書いて呉れと云ふのだから、是れはナカ
 難かしい「休」ヨシ、併し三里程もある長い字を書くのだから
 ら、定めし墨の用意はありませうな 僧「ハ、ッ」と弟子共は驚
 きました、正敷この紙を見たら、書く事は断はるであらうと思
 ひましたから、摺つては置かなかつたのであります、其處で急
 にこれから硯を取り寄せ、仕事は大勢ですと云ふ事は最とも
 の事で、忽ちの間に四斗椀の半ほど摺りあげました 僧「ヘエ……
 禪師様、この墨は如何いたしませう 一休「ア、その紙はグーッと
 座敷へ廣がらんかナ、それぢやア何卒ア一ツと拙僧が歸る途へ
 敷いて下され 僧「ヘエ…… 一休「アム…… 一ツ筆では墨が切れる
 からのウ、皆さん、大儀ぢやが湯桶に墨を入れて、附いで来て
 下さらぬか」と云はれて災難なのは弟子共、大勢寄り集まつて

各々湯桶に墨を入れて附いで参ります 一休「其れでヨシ、だ
 が普通の筆では不可から、筆の代りに筆を一木貸して呉れ 僧
 左様でございますか、承知いたしました」と筆を持つて参りま
 す 一休「此の巻紙は、近江の阪本山王の方へ引き伸して呉れ、太
 儀ぢやが急いで紙を展べて下され、拙僧は日暮れまでには降り
 て行くが、何分山の上では書き惜いからナ 僧「ハイ畏まりました
 た、其處で禪師は筆を擔いで、例の坊さん達に申しますれば、
 一休「何にしる三里の文字を書くのたによつて、途中で墨を附け
 て居るやうなことで筆勢がなくなつて面白くない、拙僧がア
 タリを附けて書き始めたら、各位は此の墨を何にか器に入れて
 少しづつ、筆先の筆先へ注いで下さい、然すれば拙僧はズン、書
 き下すから……」一山の坊主も驚きました、是れでは却つて此
 方が困らせられる様なもの 僧「仕方がない、宜しうございます」
 と二三十人の者が薬罐又は土瓶などに墨を入れて、山の半腹へ

の「し」の字だ。僧へ、エ……」一同呆れ返つて仕舞ひました。けれど、後日に至つて、阿闍利が御覽になると、具体の「し」の字になつて居ると云ふて、大いに感服をなされたと申す事だ。一体「し」の字は何々之助の「之」の字を崩したものの、名乗りなどには之と讀みます字で、むつかしく言ふと一ツ二ツ三ツ四ツ五ツアタリを附けて下を跳ねる、禪師は器を擔いで、真直に下りたやうであつたが、此の五ツの剣がチャンと附いて居つたと申すこと、其れから此の巻紙を大切に倉庫へ藏い置きました。然し、今では三里などはございませぬ、段々古くなつて切れ、今では三層なものが、漸く四五間の巻紙に残つて居る、真ん中は薄墨であつたか、但しは年數で墨が消えまするもの、か、唯カスツタやうに見ると申すこと、是れが叙山「し」の字庫のお話しでございませぬ、されば叙山法師も此の一件で驚い

彼方此方に控へて待つて居ります、すると禪師はビタリと筆に墨を含ませ、アタリを附けて置いて、其の儘肩へ引つ擔いでズン／＼山を下りて行く、何んの事はない、唯だ紙の真中を墨で塗つて居る様なもの、強情我慢の叙山法師、遠も呆れ返つて仕舞ひました。が仕方がない、禪師の仰しやつた通りに折々土瓶の墨を注いで、筆の先きを濡らし、長い紙の間を追ひかけて行く、新左衛門は紙を展べながら、ドント／＼阪本の方へ去つて行く、愈々末の所まで往くと、一休「新左衛門がかゝると不可から、紙の端を捨て、遠くへ逃げろく」新左衛門はポーンと紙の端を抛ると、禪師はウンと力を籠め、ズーツと下へ引ツ張つて一休「サア字は出来たが、ナカ／＼大骨であつた、なんと各位、御望みによつて一筆一字を書いた、僧へエ……、感心仕りました、が然し、是れはマア何んと云ふ字で、唯真ん中をお塗りなされたばかりで……」一休「其れを知らぬか、ゆめみしの、しの字、假名

て仕舞ひ一休禪師には舌を捲いて、遂に問答する者もなかつた
 と云ふ事、借て一休禪師と懸川新左衛門とは、比叡山の荒法師
 の荒膽を抜いて山を下られました。最早やツ、プリ日は暮れ
 て仕舞ひ、到底京都まで参ることは出来ません。一休「オイ新左、
 新「ハイ一休もう日も暮れた事だし、兎に角今夜は此の邊で泊
 ろうではないか。新「其れも宜しうございませう、が然し此の邊
 には宿泊るやうな家は一軒もございません。一休「無いやうだ。ア
 何處かに家は無かろうか、月は高く中空にありだ、ブラ／＼歩
 きながら探して参ろう。新「然ういたしませう」と兩人はだんだ
 ん湖水の方へ行つしやると、湖水の邊に非人の小屋が三つ程と
 ざいます。俗に之れを蒲鉾小屋と申します。一休「彼處に家がある
 非人でも宜い、乞食の小屋へ宿るも又一興ぢや、彼處へ泊ろう」
 御供をいたして居る新左衛門は、實に驚きました。が仕方がござ

いません、段々側へ寄つて御覽になると其戶外口に「氣儘庵六
 藏」と標札様のものが打つてあります。一休「ヤア是れは感心ぢや
 新左「新「ハイ一休「ナカ／＼感心な非人もあつたもの、氣儘の庵
 りに六ッ藏めるとは面白いちやアないか。新「左様でございます
 一休「何うだ今夜は此處へ泊るとしやう。新「それでも禪師、非人
 小屋でございます。一休「ア、乞食小屋でも構はぬ、泊ろう／＼、
 一休「六藏は居るかナ」と云ふと内より六藏と云へるは六十
 四五の男「六「ハイ／＼何方様でございますか、ヤア是れは貴僧
 は大徳寺の一休様でございませんか、是れは能うこそ光來つ
 しやいました。一休「ウム拙僧の名を知つて居るかナ。六「ヘエ／＼、
 能く存じて居ります。サア／＼此方へお通り遊ばせ。一休「イヤ有
 難い、今夜はナ叡山から下つて来て、宿る旅舎が無くて困つて
 居る所ぢや、何うか一夜宿めては呉れまいか。六「ヘイス様な汚
 穢い處ではございませうが、お構ひなくば、何卒お泊り下し置か

一 休 和 尚

れまするやうに、サアお供の衆も此方へ……其處は立關で……
 サア、ズーッと奥へお通り下さるやう』と云はれて、新左衛
 門は呆れ返つて仕舞つて、立關も奥もあつた話してはない、禪
 師は却つて御機嫌よく「休、是れは面白い、乞食小屋に泊ろうと
 は思はなんだ、斯様な心地よいことはない。六、只今座蒲團を持
 つて参ります」と云ふから、何んな物を出すかと思ふと蓋を一
 枚敷きまして、六「禪師様は是れへお座り下さい、お供の衆は是
 れへ」と云つて出したのが炭俵でございます、お茶を一つ献じ
 ますると頻りに木の葉を焚いてお湯を沸し、やがて其の中に入
 れましたのが、椀の木の葉だか柳の葉だか分らぬものを入れた
 其入れた茶を汲む茶碗がございませぬ、見て居ると汚穢い面桶
 を出し、之れにお茶を注いで、六「サア禪師様は何卒是れでお茶
 をお一ツ……新左衛門には茶を出す器がございませぬから、鮑
 貝の空へ泥を詰めて漏らぬやうにした奴を出した、到頭新左衛

一 休 和 尚

門は猫と間違へられて仕舞つた「休、珍味、モウ一服頂かう
 か、新左は何うぢや、新私しはモウ澤山でございます。六「サア
 禪師お寝み遊ばせ、蒲團はかけます」と云ふて荒蕪を持
 つて参りました、禪師は其處へゴロツツと横にお成りなされて
 「休、新左、今晩は何うも好い心持ちだなア」と云はれて、川新
 左衛門、御挨拶が出来ませぬ、餘りの事に呆れ返つて仕舞つた
 殊によつたら禪師は氣でも狂つたのではないか知らん、なごよ
 心配をして居ります、是れから一寝入りいたしますと、間も
 なく夜も明け離れ「休、六、殿や、誠に忝けない、昨夜一休圓らす
 も面白う遊んだ。六「其れでは禪師、モウ御出立遊ばしますか、
 一休「復た近日遊びに参るであらう、拙僧は能い友達が出来て心
 地がよいぞ。六「其れでは復たのお出でをお待ち申します」と
 別離を惜しむ様子、禪師も一夜でも泊めて呉れた庵主でもあり
 氣の合ひましたものと見わまして、互ひに別れを惜しみ、必ら

一 休 和 尚

す参る、必らずお出でを堅く約束をいたしてお別れに相なり
 ました、倍て其の後十日ばかりも経ちますと、大徳寺の御
 玄關に乞食が五六人参りまして、乞御免下さいまし、折しも御
 玄關にお出でなされし新左衛門、新何んぢや、乞私共は
 氣儘庵六蔵の乾分の者でございませうが、昨夜親分が頓死いたし
 ました、新ハア左様か、乞親分が呼吸を引き取ります時に、
 乃公が死んだら、大徳寺一休大禪師の引導を授けて戴きたい、
 斯様に當人の遺言でございませうから、何卒直々禪師様の引導を
 願ひたく出て参りました、御聞き届けの下されませうや、貴下
 様から御願ひ遊ばして下さいませう、やがて新左衛門は、
 此の由を禪師に申しあげますと、一休大禪師は「休ヨシ、
 ア、良き友が出来たと折角喜んで居つた甲斐もなく、頓死した
 とは惜しい事をした、引導は拙僧が授けて遣りませう」と、態
 々御玄關に立ち出でられて、乞食等に向ひ「休コレ、皆の衆

一 休 和 尚

六蔵が死んだら、その由を禪師に申しあげますと、一休大禪師は「休ヨシ、
 直きに後から参るによつて、お前達は一步先きへ行つて呉れ、
 ム、して引導に必要ぢやによつて龜の子を一匹捕つて置け、
 龜の子を一匹捉まへて置けよ」乞食共は互ひに顔を見合はせて
 「引導を渡すに龜が必要とは妙な事を仰つしやる」と、思つたが
 乞「委細承知いたしました」と、告別をいたし、是れより叡山
 を越へやうと加茂川を渡つて行く、幸ひに其處に龜の子が一
 匹居たから、やがて其の龜の子を持つて歸り、禪師のお出でを
 今や遅しと待つて居る、サア、是れから一休禪師が、非人氣儘
 庵六蔵の死体に如何なる引導を渡しまするか、一寸休息、次席
 に引き續き……。

第十四席

借ても紫野大徳寺の大和尚、一休大禪師は、一夜の宿を借りた

一休「もう是れで引導は済んだ、サア水葬をやらかせ」
 引導はした禪師様、餘り可笑しな引導ですなア、如何に乞食の
 引導は錢にならんからと云ふて、馬鹿にして下さるな一休「イヤ
 然うでない、乞食然うでないもねエもんだ、引導位は何處で
 も聞いて居らア、いろはには何と云ふ引導があるもんか
 馬鹿にしやアがらア」など一同の者が怒り出しまして、既に
 飛びかゝらん勢ひでございますから一休「待て、マア待て、
 能く考へて見る、焼けば灰、埋めば土となるものを、なにか殘
 りて罪となるらじ」引導と云ふものは、何にか此の世に在る中
 に悪い事をした、その罪にならぬ様にするものぢや、乃公は正
 直にして悪い事は働かぬと云ふても、知らず識らずの間に罪に
 なつて居る事が幾何もある、其の罪を滅す爲めに引導は坊主に
 頼むものぢや、然しもう六藏には引導は入らない、氣儘六藏
 と悟つた名を附けて居る位、故、引導は入らぬのぢや、引導す

の所にて確かり抑へ一休「戒名々々」傍の者には少しも解りませ
 ん、禪師は別に戒名を付ける迄もない、龜を抑へて戒名と言は
 つしやつたのは、虫の部ではあります、この位の目出度い物
 はありません、頭と尻尾と四ツの手足を、一時に隠して仕舞ふ
 は龜で、六藏とは六ツを藏すと書きます、俗名を其の儘に斯く
 言はれましたと云ふは、他に幾分か戒のお言葉と見えます、其
 の中に禪師は龜の子の胴中を縛つて在つしやるから、乞食共は
 笑ひ出した、甲「アレは何になさるのであろう、乙「龜の子の腹道
 ひ、引導の綱渡り、始まり」
 丙「馬鹿なことを言ふな、禪師
 様に御無禮だ」など、話して居ります、すると禪師は手足を
 動かして居る龜の子を、六藏の屍骸の上を道はして居らつしや
 つたが、突然、其の龜の子を釣り下げて一休「今汝に悟道の陽空
 を授かん、謹んで台聽々々、能く之れを自念せよ、」いろはにはへ
 ど、いろはにはほへど、いろはにはほへど、と、三度仰つしやつた

罪は無いのぢや 乞へエ……「休」我が日本に有る假名文字と
 云ふものは、往昔神代の頃、神代文字と云ふものがあつた、中
 古に至つて空海殿が、色は匂へど、散りぬるを、我が世誰そ常
 ならむ、有爲の奥山、今日越へて、淺き夢見し酔ひもせずと云ふ
 長歌を拵らへられた、其處でいろは四十八字の中で肝心なのが
 七字目七字目の字、其の七字目の字を書き抜いて見ろ、一人の
 乞食が指を折つて敷へ居る、乞いろはにはへと「休」其のどの字
 乞「ちりぬるをわか「休」かの字……なの字……くの字……ての
 字」ど、云ふ様に七字目七字目を書き抜いた「休」其れ讀んで見
 ろ、乞「どかなくしてす「休」何答もなく死んだのぢや、乞「ハ、ア
 何んだか諸體話のやうで……「休」イヤ、然うでない、罪がな
 いから引導は要らぬのぢやが、お前達が頼みに益せたから、何
 にか言はうとは思ふたが、別に言ふことかない、どかなくして
 しする、伊呂波四十八字は肝腎なのが初めの七文字、七文字を

讀めば、悉く皆讀んだのと同じ事になるのぢや 乞「其れは漸く
 分曉りましたが、禪師、あの龜の子は何にゝなります「休」龜の
 子が即ち六歳ぢや、古歌に「手を出さずかしらも出さず尾も出
 さず、六つおさまりて龜は萬年」と、云ふ事があるだらう、六
 つ歳まると書いて六歳ぢや 乞へエ……大分是りア面白いは
 話して……成る程へエ……面白「休」面白いと云ふ譯ではな
 いが、第一此の者が六歳と名を命けたのは感心ではないか、六
 は對數、我が朝では六尺が一間、六十間が一町、六六三十六町
 を以つて一里と定め、唐土では唯の六町を一里とする、そこで
 人間の身長が六尺で、人間を造るに四寸に二寸の棒を用ゐる、
 まさか其様な事を一休様は申されませんかでしたらう、四寸と二
 寸の穴より生れ出で、四尺と二尺の穴に埋葬る、死ぬると云ふ
 のも四と二で六、釋迦の方便、人間が死ねば西へ行く、と云ふの
 も二と四で六、それ故に六道の辻ぢやの六道錢ぢやのと云ふの

がある、故に六と云ふ数は尊い数だ、然るに氣儘庵六蔵と自分
 から悟つたのは天晴れ感心な男ぢや 乞へ、エ、さう云ふ譯の
 ものですかね、一休して此の六蔵と云ふ者は、元と南朝の皇帝
 に仕へ奉つた、大内義弘と云ふ人の家來に深尾但馬守と云ふ者
 があつた、その家臣で新三郎と云ふ者、仔細あつて世を味氣
 なく思ひ、自ら好んで非人乞食の群には遣入つて居るが、イヤ
 ナカ、の學者にして、南朝の勇士が悉く亡び、死んだ者もあ
 りば遠國へ参つた者もある、今この京都近くに住んで居る敵と見
 た人の縁を食まんより、寧ろ他の餘餐を喫べて、此の儘で居れ
 ば、自殺するにも及ばずと、天命を知つて斯くして居つた、其
 れが壽命來たつて遂に命を終つたのぢや」と、六蔵の身の上を
 物語られました、佛法では、諸行無常、是生滅法、生滅々意、
 寂滅爲樂、死するを以つて樂しみとする、御經にございます
 其處で乞食共も禪師の御説明によつて、漸やく安心いたし、乾

親の博識なるに感服いたしまして、是れより一同湖水の中央に
 漕ぎ出して、屍骸を抛込んだと云ふこととございます、斯くし
 て其の年も暮れ、明くれば應永二十年正月元日、都の町々は、
 何れも門松七五三飾、陽々として殊の外の賑はひでございます
 神道でも佛道でも此の正月のお飾りはいたします、七五三の
 と申して、之れは天神七代、地神五代、所謂天地人三才を象り
 ましたものだと云ひ、何れも三ヶ日は雑煮を祝ひ、屠蘇都へて
 目出度いもので持ち切つて居ります、丁度此の日に一休禪師
 は竹の先きに鯛體を付けて、目出度い、と云つて都の町中を
 お歩きになりました、餘程變つた方でございます、處が四條室
 町上る處に、當時京都第一の書林、錢屋久兵衛と云ふ、是れは
 前席にも伺ひましたる通り、一休様とは別段の御懇意をいたし
 て居ります仲でございますから、一休禪師は、此所の門口の所
 へ歩つてお出でになりまして、一休「ハイ、今日は……」主人の久

一 休 和 尙

兵衛が、元朝でございすから、先づ膳に付き、續いて女房から番頭丁雅に至るまで、皆打ち揃つて、屠蘇を祝ひ、之れから丁度雑煮を食へ様と云ふ處へ、一休禪師が入つてお出でになつた、朝坊主丸儲けとかいふことがございす、元日の朝、早々から禪學を學んで居らるから、左程には驚きはいたしません、禪學が、他の人々達には朝ツバラから忌な物を持ち込んで来たもんだと眉に皺を寄せて居る、主の久兵衛は、久イヤ是れは禪師様能ふ入らつしやいました、誠に静かな春でお目出度うございす、サア、何卒此方へ……と、奥座敷へ案内する、久エ、今日は御悠ぐりとお話しを願ひます、マア一ぱい如何でございす、一休オヤ、何うも其れは有難いな、では早速に馳走にならうと、膳の上を御覧なさると、裏白を敷いて白目綱と申します、やつ、是れは正月の廿日まで飾つて置いて、廿日に焼いて食ふ

一 休 和 尙

のだそうで、一休イヤ、何うもいろ／＼なものが並んで居るなア、何んだニ夫れは……久是れは山草と稱します、齒菜でございす、一休何に死んだ、久御元談仰しやつちやア困ります、山草と申します、何に死んだ、一休病ひ草、久病ひ草ではございませぬ、一休裏白もある、一休白といふものは淨いもので、楢桶などを白布で巻く……久イヤ何うも其の様な事は仰しやらすに……いますな、元日早くから何うか其の様な事は仰しやらすに……雑煮は如何でございす、一休雑煮……其れは結構、早速頂戴しやうと、箸をお取んなさうとすると、久エ、是れは太箸と申しまして、身上が太なる様に云ふので用ひます、イヤ何うも誠に目出度い箸で、サア何卒お上りを……一休ハア、其れでは何にかへ、是れを太箸と云ふのか、久ハイヤ一休だが斯様、跡先が細い様だが、して見ると身上が後に段々細くなる、云ふ譯か、久御元談を仰しやつては住けません、サア汁が冷め

ますから召し上つて……一休「アッ久兵衛、齒が抜けた 久「へエ
 ……夢に見てさへ悪いと申すに、元日早々齒が抜けたなんて
 餘りよいことぢやアございませんなア 一休「ア、左様ではない、
 餅に四勿三分の銀玉が入つて居た 久「ア、左様で、夫れはその
 能々搗く時に入れましたので 一休「何んでな 久「夫れを食ふと金
 持ちになる、毎年一つづゝ入れて置きます、誰れか食ひ當る者
 が誠に仕合せがよいと云ふので、扱ては禪師様がお上りなすつ
 たのですな 一休「フム、左様か 久「貴僧は當年金持ちになります
 一休「馬鹿言ひなさい、餅の中に金なんぞを入れて置くのは不可
 ない、以來は止したが宜いな 久「へエ……何故で……一休「分ら
 ぬ奴だなア、もちかねるといつてな…… 久「何うも碌なことは
 仰しやらないのですな 一休「何んだへ其處に在るのは…… 久「之
 れは白目鯛と申しまして、二十日まで斯うやつて置きます 一休「
 見て居るだけの事か 久「左様で、先一方の頭になります 一休「

新様に差し置まして、二十日になつて是れを焼いて家中で骨
 まで食べます 一休「ハア、して見ると今の處では隠し者…… 獄門
 だな、廿日になつて骨上げをする 久「何うも御元談ばかりで恐
 れ入ります、何うか左様なことは眞平御免……此の通り 一休「ア
 ハ、手合はせしたな、夫れへ珠數をかける今日他日との
 様だ、久「もう貴僧には呆れて物は言へません、今日他日との
 違ひまして、正月元日の事でございますから、何うか夫ればか
 りは仰しやいません様に…… 一休「左様か、然う貴様が氣に掛け
 るなら、拙僧が一つ祝ひ直して遣らう、紙と硯を持つて來なさ
 い 久「へエ有難う存じます、何うかお目出度いものを願ひます
 一休「ヨシ、サア墨が摺れたら出しなさい……酒を注いで呉
 れ、 一休「ヨシ、サア墨が摺れたら出しなさい……酒を注いで呉
 正月の儀式は死ぬること始め、一枚の白紙へ、

休 和 尙

「休何うだ、目出度からう」と、又一枚の紙へ、
 門松は冥途の旅の一里塚
 と書いて「休イヤ、我れながら能く出来た、何うだ久兵衛」
 へエ……成る程「休世の中に死ぬ程目出度いものはない、一寸
 是れを御覽」と、久兵衛の鼻ッ先さへ例の鬨を突き付けたか
 ら、イヤ久兵衛は驚いたの驚かないのちやございませぬ
 師様、御元談をなすつては不可ません「休アツハ、其處
 で此の歌は久兵衛が貰つて久何うか今日は御悠くりお話しを
 ……「休イヤ、今日は未だ行く處があるから、何れ又春長にお
 邪魔します、ハイ左様なら」と、表の方へ飛び出した、
 度通りかゝつた蟻川新左衛門「新是れは禪師には、何れへお越
 しになります「休イヤ新左衛門か、お前も大層早やく何處へ出
 かけた新ハイ、一二軒年頭を済ませまして、是れから禪師の出

休 和 尙

御許へ参ります考へ「休ア、左様か、拙僧も今日は元旦の禮
 に出た、何んと新左衛門、之れを見さつしやい、誠に目出度い
 年の始め」と、竹の先の鬨を突き付けた「新之れは恐れ入
 りました」と、流石は新左衛門感心をした、感心をしたのは此
 の人だけ、他の者には分りません、サア、是れから其の當時
 名高博識の名僧、本願寺八代目蓮如上人と、一休大禪師と問
 答と云ふ有名なるお話しに相成りまするが、そは例によつて次
 席に申しあげます……

第十五席

借て或る日の事、一休禪師は蟻川新左衛門に向はれまして「休
 新左衛門、何にか御用で「休今日は一つ大谷に出かけ様か
 ナ、大谷の蓮如は何に云ふ人物であるか、一問答遣つて来やう
 と思ふが……新ハイ、其れは宜しうございませう、御供仕り

人気が寄せの節の稽古をやつて居る所……と、聞いて一休禪師
 一休「ゑらい」と、手をお拍ちなすつた一休「イヤナカ〜」と、
 ん話せる事を言ふナ、だが、袈裟法衣有難そうに見ゆれども、
 之れも俗家の他方本願とは何うだへ」と、聞いて遠如上人、少
 しムツとしたが、遠「物の名は所に依りてかはるなり、浪花の葦
 も伊勢の濱萩」と、いつたのは、三界無安、樹下石上を宿とす
 る僧と違つて、遠如上人は女房を持つてお暮しになる、他の坊
 さんとは大きに違ひます一休時に、正面にビカ〜光つて居る
 のは、アリヤ那塵ぢやい、遠「アレは宗旨の看板一休成る程其の
 前に花や線香の列んで居る、アレは何んの爲めぢや、遠「アレは
 興行銭取りの招牌」出家に成りましても斯くの如き名僧智識と
 お成りなさると、極意の極意を仰しやるもので、何にしろ聴
 く人が一休禪師、問はれる人が遠如上人、佛に向つてお経を讀
 むの、アレは本尊様だのとは仰しやらない、成る程然うかも知

ます」と、是れから禪師は新左衛門をお連れに相成りまして大
 谷にお出でになります、此の大谷の遠如上人と云ふ方も、其の
 當時博識非凡の高僧で、尤も此の日の夕景でございましたが、
 懸がて玄關に参り御執次を乞ひます、徒弟の一人其れに出て
 参りまして、徒「これはい〜、大徳寺の一休様でございますか
 一休「ア、一休ぢやが、遠如上殿は居られるかな、徒「ハイ只今勤行
 の最中で……一休「ア、左様か、徒「少々お待ち下さる様に一休「ヨ
 イ〜其れ参らう〜」と執次の抑留のも聞かないで、本堂の
 方へ歩つて来る、今しも本堂には遠如上人、お弟子の衆大勢を
 左右に従へまして切りにも南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛と御經文
 を讀誦して在つしやる、すると一休禪師はヅカ〜と不意に後
 つて一休「遠如上ん何にを恐圖〜」と、徐に振り返つて見ると一休だ、
 ろから言葉をかけられたから、徐に振り返つて見ると一休だ、
 遠「コンハ〜」一休殿、能うこそお越しなされた、只今丁度、

尚 和 休 一

氣でなりませぬ。弟「和尚様、如何でございませぬ。献上の燈籠は
 ……一休「ア、今日は幾日ぢやナ。弟「ハイ、十二日でございます。禪師は
 よ「一休「然うか、今日は明日は十三日ぢやアのウ。禪師は暫らく
 さいませぬ、彼れは今日中に献上する筈で……」禪師は暫らく
 考へてお在でになりましたが「一休「ヨシ、心配するな、拙僧が
 作る」と、是れからお弟子に吩咐けて、裏の竹藪の青竹を取ら
 せ、自から削つて之れをため、處々を紙索で縛つて、怪しき紙
 を張つて、何にか狂詩狂歌様のものを書いて居られます、こ
 の燈籠といふものは、俗家の身分に應じて、十燈、百燈、或ひは千
 燈、萬燈を供へたもので、所が今釋尊が祇園精舎へ御歸りにな
 りまする時に、烈風吹き来たつて、火は悉く消れて仕舞ひまし
 た、その時に貧女が粗末なる土器に油を注し、供へて在つたの
 が一體残り、風に散りながら燈火が點いて居りましたのが、片

尚 利 休 一

ツコウをなされたのは何んの理由で「一休「其處ぢやて新左、風は
 空氣より起る、世の中に空氣なき時は人間は生まては居られぬ
 空氣の風がなくなれば人間の最後、それだから眼を押へてべ
 と遣つたのだ。新「成る程、それで悉皆了解しました、恐れ入つた
 ものでございませぬ。然う新うして居る内に早や七月の孟蘭盆會
 と相成りました、例年諸寺の各本山より、美しき燈籠を御所へ
 献上する事になつて居ります、何れも九日までに之れを納
 めるのでございませぬ、是れまで大徳寺は然う云ふ例はございま
 せんでしたけれど、當年は藤の侍從様の新益でありませぬから
 特に今年は大徳寺へも十二日まで燈籠を献上せられる様と云ふ
 御沙汰に相成りました、委細承知仕りましたと御拜受をなされ
 た儘、何處の職人にお託へなさるでなく、又頼まうとも成さら
 ず、禪師はお捨おき遊ばして居られます、然るに早や十二日
 となり献上の燈籠が其日になつても出来ませぬお弟子達は氣が

一 休 和 尚

傍の蓮の葉の上に乗つた、風の爲めに蓮が揺れて、いま陥込
うとする、所へ何れからか飛んで参つたか知りませんが、一羽
の鶴が彼の蓮の葉を啜へた、然し鶴が鼓翼をしようと、燈火が消
ねますから苦んで居ると、下から鶴が浮き上つて來ました、そ
の鶴の背中に鶴が止つた、これ長者の萬燈が消れて、發の一燈
が残ると云ふお話しで、鶴の上には鶴が乗つて居るのは、今佛檀
の三具足であるのだと、今から百年二百年前に、高い所へ上つ
て坊さんが説教しますと、何んにも知らない、お爺さんやお婆
さんは、財布の底を叩いて御冥加錢を上げ、南無阿彌陀佛とか
何んとか云つて、拜んで居つたそうでございませうが、今時のお
方には其の様なお説教で然うかと仰しやつて信ずるお方は一人
もございませぬ、其の眞偽は借て置きました、兎に角燈籠を釋
尊に供へたと云ふ例によつて、此の孟蘭盆會には佛の爲めに、
御燈火を供へるには違ひない、十二日の午刻後、禪師は墨染の

一 休 和 尚

衣に怪しき草履を穿いて、彼の自からお作りになりました、
最も汚なき燈籠を風呂敷に包み、之れを持つて公卿門口にお
かゝりなさる門士ア、何れの僧である』と答めた、何にしる
禪師は一寸とも衣服などにはお介意なされぬ方でございませうか
ら、門衛の士も何處の坊主が遣つて來たのだらうと門士「コリヤ
坊主何處へ通る」休「拙僧は大徳寺の宗純ちや門士「へエ」と
吃驚する門士「是れは何うも失禮いたしました、何卒お通り下さ
れまし」と、其の儘一休禪師は、案内もなく清凉殿へお上りに
なる、庭を御覽遊ばすと、漢竹と吳竹のみ、他に樹木はござい
ませぬ、椽側の釘には多くの美しき燈籠がかゝつて居ります、
其の中へ彼の汚なき御手製の燈籠を掛けて置いてお歸りに相成
りました、夕景に至つて御番の者は、燈火を入れに廻ります
暫らく経つと帝は其處へ出御あらせられて御覽に相成ると、致
璃にして花を描いたのもあれば、絹張りにて御覽に相成ると、致

休 和 尚

た物もあり、何にしる献上の燈籠と云ふ事でございますから、
美々しきものが数多ございます、其の中でも一ト際目立ちます
のは、最も奇麗な方では、なく汚ない方で……帝も何に氣なく
其れを御覽遊ばされると、

聖靈 今日日出來向、懸得燈籠天上月
雨露 直供萬葉棚、松風流水讀經聲

其の外に 山城の瓜や茄子を其のまゝに
手向けとなせや鴨川の水

と燈籠は手造りの粗末なものではございまして、筆跡はいと
も見事に書かれてある、何んと思はれましたか、帝は自ら燈籠
を下したまひ、燈明を消して御衣の袖に彼の燈籠を隠し、其の
まゝ入御にならせられました、總て佛法家では此孟蘭盆と言ふ
ものを大切に致しまして、此日に大抵な人は先祖の墓参りをす

休 和 尚

るのでございますから、愈十六日と言ふ日には、此大徳寺真珠
庵へも、追々檀家の者が参詣を致して参りました、甲和尙さ
ん、何うも嚴しい事でございますナ、休ハ、何うも此器さは
堪らぬのウ、併し今日はお墓参りぢやナ、甲ヘエ……、實はお
寺へ参詣をしまして、これから大瀧に踊りがございます、其れ
を見に行かうと存じて居ります、休ウム、其れは面白からう、
拙僧も一緒に行かう、ヤア禪師様、お出で遊ばしますか、休ハ
イ、見に行かう、左様でございますか、それではお供をいたし
ませう、休一寸待つて下され、と、一室の内へ遣入つて、何に
か身繕ひをして居りましたが、是れより禪師は皆々一同と打ち
連れ立ち、大瀧へ来て見ますと、今日は足利將軍義持公、棧
敷の上から彼の盆踊りを見て楽しんでお在で遊ばされました、何
にしろ其の雑沓はナカ、大變なもので、非田院、中座等の者
は、皆十手半棒を持つて、整固に及んで居ります、禪師を始め

夜、虫なしの流れ合ひ、細う長いが樂しみぢや、歌ひや飲めや春の朝、花を愛すりや身の立たぬ、釋迦のお嫌のやすだら女も美い、を捨て居た、美しいとは何れの事よ、皮が包んだ胃、五夜も寝もせで迷ふ朝、腹が膨れて能う實が登つた、踊れや踊れ踊れやい、ヤアトヤ、ヨイ」と傍の人物ども見ありア何に者だ、ありア何んだ」と驚いて居ります、中にも將軍家は彼れをこの御指圖に、發固の役人共はバラツと禪師の傍に駆け來たり、役「コリヤ、御用ぢや、神妙にしろツ、神妙にせぬかッ」と云へどもお構ひなく、一休「竹の切り節の……」と取り籠らうとする、一休禪師は尙も踊り狂ふて居る、役人共は忽ちの間に捕縛に及んで、頬被りを取り除けて見ると、此は抑も如何に捕縛に如何に、紫野大徳寺一休禪師でございますから、喫驚いたした役人共、顔を知つて召し捕らすに見逃す事も出來兼ね、繩を掛けてから之れを解く譯にも行きませす、早速此の

一同の者は、踊りを見て居りました間に、彼の一休禪師は着て居る衣物を脱ぎ捨てますと、下には野晒の浴衣を着まして、紅木綿の三尺帯を締め、同じ紅木綿の頬被り、其の儘で躍り出して、して踊の中へ加り、一緒に成つて踊り始めました、檀家の皆々見ればと計りに驚ろき呆れて居ります、途端、音頭取は其れと見上げるより音頭を半ばで止めました、此の時禪師は一調子聲張り上げ、宛ながら割れ竹の如き聲にて、一休「竹の切り節の溜水、清ます濁らず出す入らず、世は彌之助の袖のしづ、片々寄らす片も過せば鬼に成る、餅の千切はとりこが仲人、何にを愛岡川も柳の水の流れを歎くぞ水の、浅う契りて未まで逃げよ、紅葉は色の薄いが散か、濃が先づ散る習慣なり、人の通り物云鳥が人の云ふこと聞く獸も、常の人も尙だならぬ、人の通りに物云鳥が思ふて居ると、悪るう倒けると六になる、音羽の瀧の白糸も、